

---

# 魔法少女リリカルなのは Setsuna's Story (RoDSその1)

レン・バレッタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Setsuna's Story (

RODSその1)

### 【Zコード】

Z2008S

### 【作者名】

レン・バレッタ

### 【あらすじ】

翡翠刹那は死んだ……らしい。彼女にはあまり実感はないが。どうも神様がテンプレートにもどこぞに転生させてくれるらしい。正直どうでもいい、と思っていたら、どうもそこは「魔法少女リリカルなのは」の世界なんだとか。刹那はちょっとばかしチートな物を貰つてなのはの世界につ！

## 前書き + 目次です。—— ( 前書き )

序章終了後にやれりと継つていていたこのシリーズ。終わつてないのに始めちゃつた……。

更新はフルクラの合間にやるので、かなり遅いと思ひます！ 大声で言つことじやないですけどね。

ガールズラブ、いわゆる百合は出るが分かつません。多分出ると思ひますが……。

では、始まります。

## 前書き + 直伝ですよー

初めてまして。私は、**ビニガル**の国ではセイヴナーなんて呼ばれ方をしているらしい都市国日本を守護する第一部隊。日本政府直属特別特務守護部隊『十二師団』のアーティラリーやらせていただいてるレン・バレッタです。

えー、「それってなんだよ意味分かんねーよ！」という方は、私の所属する十二師団がその内で『ワールド・クライシス！』を読んでください。まだ序章の現在、一瞬だけ十二師団の名前が出ていますから。ええ、ええ当然ただの告知というか宣伝ですよそれが何か？ 良いじゃないですか！ こうやって宣伝したおかげでワルクラ（当然ワールド・クライシス！の略称ですよ？）を読む方が増えたら、作者の結城葵さんのやる気が出て更新速度がアップするかもしれないじゃないですか！ そしたら私が少しでも速く出られるじゃないですかっ！ こうやってここだけしか出られないのは空しいんですよ——————！

はあ……まあいいです。

ともかくにもそんな話は置いといてですね。この『レン・バレッタの妄想』一次創作そのへです！（Renne of Delus ion Second 略してRODS）シリーズは、何度も名乗りますが私、レン・バレッタの一次創作です。まあ名前の通りですね。ワルクラが進む中、ひつそりとこっちが暇を見て進んでいく訳ですよ。私も十二師団としての仕事があるんで更新はかなり遅めでしょうけどねー。

一次創作で出るキャラクター、ていうか主人公は主に私が、結城葵さんが考てる別作品の主人公とかが持ち出されます。だからこのシリーズで出てくる主人公とかは、新しいオリジナル小説に出てくるかもしない訳です。能力とかは別にしてですが。

あ、ぶっちゃけちゃいますと、このシリーズは基本プロットとか

多分ないと思うので……。ぐだぐだな展開だったりしても、怒らないでくれると嬉しいですよー

えーっと、他に何かあったっけ。

あ、そうそう。言つまでもない、というか私の解釈なので正しいとは言いませんが、このシリーズでやる一次創作する原作の作品のキャラとかですけどね。私的解釈だったり、こんな感じだったよねー、つていう風に台詞は喋らせるので、悪口とかクレーム（？）は無視しますから。あ、でも、「いやいや、このキャラはこういう喋り方だよ?」とか、「このキャラはさすがに性格違い過ぎじゃない? もつとこんな感じだと思つよ」ってこいつのは大喜びして御受けいたします。

まあ、なんにしても先に謝りますが……。

このシリーズで二次創作する原作のキャラのファンの皆さん、本当に、申し訳ございませんッ！！

そこまでキャラのイメージが壊れそうな感じにするつもりはないですが、一応イメージなんて人それぞれなので謝つておきます。ふう……。喋つたー。ここまで長々と喋るのは日常生活じゃなかなかありませんからねー。仕事だとあるんですが。

あ、ちなみにかなり今更ですが、私、レン・バレッタのことに関するでは、『ワールド・クライシス!』で出てくるのを待つてくださいねー。ここでは自己紹介とかしませんし、シリーズの中に出ても、せんせん性格も能力も何もかも違うので、シリーズ内の『レン・バレッタ』を見て、「ワルクラのレンとこっちのレン全然違うんだけどどういうことだよー!」とか言わないでくださいね? ちゃんと注意はしました。もし言つて来たら、これを読め、と叫びますので!! 注意を。

ではでは。もう一二〇〇文字は突破しました。  
この辺りで、「前書き+宣伝ですよー」を終了します。

あ、「終了します」の辺りで一四〇〇文字突破しました。  
どうでもいいんですけどね

b y十一師団 7th レン・バレッタ

## 第一話「テンプレート……だね b.y刹那」（前書き）

……ていうか今考えたら、私詳しい設定とかはあまりしらない……。  
詳しい方々！ どうか怒らないでください……。

## 第一話「テンプレート……だね b y 刹那」

どこの名家のお嬢様、翡翠ひごりせつ 刹那。三歳の頃に戦闘技術の基礎を教わり、同じ歳に、犯罪者一〇〇〇人のいる孤島に放り込まれて生きるための技術を無理矢理叩き込まれ、四歳の時には、その技術を使い、どのくらいだと殺して、どのくらいだと殺さなくて済むかを叩き込まれるという、バカみたいな教育を施された少女である。そんな少女は今。

神様の田の前にいる。

現在の年齢約一四歳。現在中学一年生、中頃。

どうも彼女は死んだらしい。

さて、そろそろ三人称まがいの語り方はやめよう。

一応、さつきから語つてたのはその本人、私、翡翠刹那ですよ。

…。

とりあえず話を戻して。私が死んだらしいのだけど

「まあ……どうでもいい」

「ええっ！？ 自分が死んだのにどうでも良いの…？」

「……そう言えるくらいの人生だったから」

「うわあ……」

さつきも言つたけど。この私の前にいる女人は神様らしい。聞いた所によると、一応女神の位置づけをされていた、北欧神話のヘルさん。ファザコンな神様です。

「いや、神様には失礼なんだろうけど」

「それに……スペル・マジシャンとワード・マジシャンの戦争は飽きた」

「あー、まあそんな歳であんな戦争に巻き込まれてたら嫌だよねえ」「理解出来ない人は、いつか出るかもしね（出るかは分からな

い)『スペル・マジック!』を読んで、いつ出るかなんて私は知らないけど。

「えーっと、とにかくとにかく！ 貴女は本当は死ぬはずじゃなかったの！」

「……かなりテンプレ」

「良いのっ、テンプレで！ だから転生させてあげる！ オーディンのクソ親父の許可も貰つたしね！」

「……一応最高神」

「い・い・の！ 私を兄弟一人と一緒にニギルヘイムなんかに追放したあのおっさんが悪いのー！」

「気持ちちは分かるけど……」

「とにかく！ 貴女を転生させるよー、チートとかあげるよー」

「……本当にテンプレ」

まあいいや。平和に暮らせればそれで良いし。このまま天国に行くのも悪くないし。どちらにしても私は平和。……ぶっちゃけあの面倒な戦争から抜け出させてくれた神様には感謝してるといつても過言ではないし。

「で、どこに転生するの……？」

「んー、えっとねー、当選したのは……『魔法少女リリカルなのは』だよー」

「行く絶対行く確實に行くさつさと行かせて」

「え、ええ？ なんか凄い変わり様なんんですけど……」

「実は私。あの戦争の中……あの戦争って言つても分からないね。とにかくいろんな事情な交錯する中、何か心の休み場所が欲しいと思つてて、別に中二病とかではないけど、なのはのシリーズとかその他のゲームを見てたりやつてた。ん……フエイトとなのはとはやって可愛い（左から一位、一位、三位）。

「好きな世界なら変わるのは当然……」

「まあそれもそうだねー。じゃあ欲しいチートを御願いします、チート、かあ……。私もなのはの一次創作書いてみたくて、いろ

「……と『作家を読もう』でなのはの探してみたんだよね。とりあえ  
ずそこで出て来た能力をいろいろと調べたり、それが出てくるアーニ  
メや『マンガやラノベ』を見てみたりしてたから……大体分か  
るはず。

「……私、戦争中だつたのに随分とオタクなことしてた。

「……他の設定先に決めちやダメ?」

「別に良いよ?」

「……じゃあ歳は五歳。確かこの歳くらいが多かつたよね……」

「んー、まあそうだね。えーっと、確か無印が九才からだけ。本

編の三、四年くらい前だね」

「ん。容姿は……今まで良いや。なんか美少女だなんだって、兄さんも騒いでたし、多分不細工ではないと思うから」

ちなみに。私は銀髪の琥珀色の目つていう感じだけど、まあいろいろいじられてる(科学的に)ので、左腕にバルキリー・エッジとかいう意味不明な兵器がつけられてたりするけど、まあなんだかんだであんな状況でも学校行つてるとね、告白されたりしてたから、少なくとも不細工ではないと思つ。

……自意識過剰とかナルシストとか言つた人、あとでバルキリー・エッジ使つ。

「確かに可愛いよ刹那ちゃんは。お世辞とかじやなくて」

「ありがと……。あと、家はなのはの家から歩いて一〇分くらいのところで、お金は高校卒業するまで働かなくても大丈夫なくらいちょうどだい。親とかの設定は前世のを使ってくれると楽」

「確かに両親が刹那ちゃんを産んだ後、そのご両親、つまり刹那ちゃんの祖父母の教育に耐えられずに失踪、刹那ちゃんも連れて行こうと思つたけど祖父母に妨害され、仕方なく諦めた。祖父母はどうする? 日本に住まわせる?」

「あの二人達はアメリカにでも住まわせておいて。偽物でも別人でも、その設定を持つてる人と同じくになるのは虫酸が走る」

「凄い言い様……じゃあアメリカの豪邸に住んでる、つてことで。

で、今はお兄さんと二人暮らし

「兄さんも失踪扱いでお願い」

「ええ……随分設定変わつてない？」

「気にしないで」

「はあ……分かつた。じゃあそつする。お兄さんも失踪、つと。そんなものかな？」

「うん。あとはチート方面

ん……どうするかな。

「とりあえず、インテリジョントデバイスを一つ。あと私の知つてる軌跡シリーズとイースシリーズのキャラ全員分のユニゾンデバイスを授からせて」

「そこを授からせて、つて言う辺り優しいよねー」

「微妙に日本語おかしくなつた気はするけど。まあいいや、そのユニゾンデバイスは私の成長と共に身長とかが成長したり、何故か5Sくらい魔力持つてたりその他設定ありな超特殊仕様で」

「それはもう魔導師なんぢやないかな……。それで？」

「魔法はなのは世界のど、軌跡シリーズの動力魔法と、私の世界のが使えるようにしてくれるとありがたい。私の世界のは魔力バカみたいにあつたからいじらなくて良い。そのままにしてくれば、なのはの方は……とりえあずSSSランクの一倍くらいちょうどだい」

「はいはい。次はー？」

「あ、軌跡キャラのレンには、機巧魔<sup>アスラ・マギーナ</sup> 神を私が知る限り使えるようになってくれる? あ、当然パテル＝マテルは呼べるようにして」

「前者は出来る。後者は当然出来る。あとは?」

「戦艦ちゅうだい」

「アースらみたいな?」

「そう。命名、『背中のネコ号』」

「……乗組員は、リトバスメンバーにしつくね

「ん」

「この女神ヘル……今まで分かるとは思わなかつたよ。

「で？ まだあるの？」

「言い忘れてたけど。バルキリー・エッジはどうなくて良い」

「え？ なんで？ あれは……」

「……確かに私が人外の証拠みたいなものだけ、今更なくなられると違和感しかない」

「……分かった。つていうか、そのままで良いの？」

「あの魔法はかかったまま。身体のことは……お母さん達の、変な意味じやない努力の成果だから……」

「錬金術……ね」

お父さんには種がなかつたらしい。だから……正規じやない方法で私を創つた。これに関してはその内語る。

「寿命はちゃんと本来の人間並みに。怪物化は出来なくして、限りなく人間に近い感じに。出来れば、あの魔法の副作用もなくしてほしいんだけど……」

「最後の意外は出来るよ。……残念だけど、最高神の魔法を人間が出来うる限り再現したそれは私ごときじや、改变は無理……ごめんね」

「そつか……。じゃあ良いよ。発動させなければ良いんだし」

「……じゃあ、他に何かあれば言つて？」

「じゃあ……世界改变の力を下さい」

「いいけど……痛いよ？ 神様じやない人以外がやると、改变の数と規模だけ怪我するから」

「別に良い」

「いいならいいけど……あまり使いすぎないようにね？ あれの発動連発は嫌でしょ？」

「分かつてる。あ、これ最後、後で追加する権利とガーデスキルち

ょうだい」

「前者は多くても五個までだけど良い？」

「良い。多分余るかそのくらいで収まるから」

「はいはーい。じゃあちょっと待つてねー。ピ・ポ・パ・ボ、っと」

なんか、シヨン！ とヘルの手にボードが出て来たかと思つと、何かの操作をしだした。

「いや、今更だけど結構チートだね。私の存在がロストロギア指定されたらどうしよう……。ていうかまずコニゾン陣にその心配が……。」

「なんて不安を抱えていると、ヘルは操作を終えたらしかつた。」

「はい。まずはデバイスです。一応、イースVSに出てた名前からとつて、ケルンバイターにしてみました」

「レーヴェの剣の名前だ……」

「ちなみに、初期形状はスペル・ロッヂの形。刹那ちゃんは杖でよかつたよね？ 一応他の形もいれてみたけどさ。他のモードは刹那ちゃんの知ってる軌跡シリーズとイースシリーズのキャラの武器と同数。まあかなり大量だね。多分全部は使わないんじゃないかな」

「だろうね。」

「コニゾン陣は、ケルンバイターを通して背中のネックから呼び出せるよ。ちなみに全員呼ぶことも可能」

「魔力のリミッターとかはかけられる？」

「かけてれますよー。まあ、後の説明は向こうでケルンバイターに聞いて。マスター登録はもうしてあるからねー」

「あれって私がやらなきゃいけなかつたんじや……」

「一応女神様だから出来ました」

「じ、都合主義、つてこうこうのを言つのかな……」

「じゃあ、そろそろ良いかな？」

ガチャヤリ、といつの間にやらあつたドアを開けるヘル。

「……落ちるんじゃないんだ」

「落ちたら地獄だよ？」

「そう。じゃあ、一応お礼は言つとく。実は故意的に殺して楽しもうとしてる、なんてふざけた神様じゃないことを祈つておくから」

「そんなことしたらオーディンの親父に殺されるから……。いやマジで……」

「ん。じゃあ、バイバイ。また会えるかは知らないけど」「はいはーい いつてらつしゃーい」

私はその扉を通り、すると突然目の前が眩しい光に包まれて。

\* \* \*

気がつけばジジの家の中だった。

どこの、とこよりはあなたの家ですよ。マスター

「ん? ..... ああ。ケルンか」

ケルン? なるほど、私の愛称ですか。ケルンバイターだからケルン。まあ妥当ですね

「ん.....で、今何時?」

夕方です

「じゃあ.....公園に行こう」

公園ですか?

確か、大抵の二次創作だと、公園でなのはが泣いていたはず.....。不謹慎ではあるけど、邂逅のチャンスだよ。

とりあえず、友達になつてこようと思います。

あ、ちなみにどうでも良い上に今の話に関係ないけど、ケルンは私の首にかけられたネックレス.....にぶら下がつている指輪だよ。

「じゃあ.....行こう」

と、言つ訳で。

なのはの世界での生活が、始まりました。



## 第一話「トランプレート……だね　ｂｙ刹那」（後書き）

なのはの知識は、前書きでも言いましたが、そこまで深くないです。

Wikipedia参考にしたりはしますけど……。

そんなやつが書くな！　といつ人は、どうか別の作品に。

## 第一話「邂逅したり、します bヨケルン」（前書き）

喋り方と一人称の感じが違うのは、内面だとべらべら喋つて、対人とかだとそこまでべらべら喋らない子だからだよ？ なーんて、言い訳してみたりして。bヨレン・バレッタ

## 第一話「邂逅したり、します　ｂｙケルン」

ケルンの道案内でなのはがいるであろう公園に小走りで向かう。途中で本当に五歳まで戻った自分を見てちよつと感動した。

そして公園に到着。

……案の定いた。一人の女の子。

栗色の髪をツインテールにして、俯きながらベンチに座っている。その娘の方から泣き声が聞こえてくるのは、氣のせいじゃないはず。えーっと。とりあえず、話しかけてみよう。

少しばかり緊張しながら彼女に近づいていく。

「…………どうしたの？」

「ふえ？」

ふ、と顔を上げた彼女は……どう考へてもなのはでした。よかつた、人違ひだつたら私恥ずかしい人だよ……。

「いや、なんか泣いてるから……」

「なのはは……ひつく……良い子だから泣いてないよ……」

「……泣きながら言われても説得力ない」

「泣いてないもん……」

む……これで「泣いてる」って返したら、多分リープする……。

「じゃあ泣いてない……。で、なんで一人でこんな所にいるの……？」

？」

「…………お父さんがお仕事で怪我しちゃつて……入院してるの。それで、お母さんもおねえちゃんもお店とおみまいで忙しくつて……お兄ちゃんはずつとこわい顔してるの……。でも……なのはは良い子だから一人でも平気なの……」

…………なるほど、何回か読んでこんな感じの返答が来るとは思つてたけど、予想以上に重い……。ていうかこんな歳の娘がこんなにいろいろ抱え込んでいいのか甚だ疑問なんだけど……。

家庭環境つて……大事だね。

「……。じゃあ、これはいらないお節介だと思つて、迷惑がつて良いから、遊びながら家まで送つてあげる」

「ふえ？」

「ほら、行こ」

「……いいの？」

「良くなかつたら言わない」

すると、なのはは急に笑顔になつて、

「ありがとう！あのねあのね！私、高町なのはつて叫つの！」

「さじだよ！おねえちゃんは？」

「私も五歳だからおねえちゃんじゃない。私は彌彩刹那……刹那で

いい」

「せつなちゃん？じゃあなたのことはのひもなのはで戻いのー？」

「ん……分かつた」

それから私は、なのはと手をつないでなのはの家に向かつた。他愛無い話、好きな物とか好きな食べ物とか、もはや自己紹介の域でしかない」とばかりだけど、それでもどこか楽しかつたのは、あんまりそんな話をする機械がなかつたからかもしれない。前世では、友達と話すのは戦争の」とばかりだつたから……。

ん……来て良かった。

そういつしてこるづちに、なのはの家の前にたどり着いた。

「ひひ……？」

「うん……」

言しながら戸を開ける。道場あるからなのか、横に開ける感じの扉だ。まあ、言わなくても分かるか。

「お母さん！ ただいまー！」

すると中から桃子さんが……つて、若ひ……え？ これ本当に桃子さん？ 美由希さんじやないよね……？ 眼鏡かけてないし……。お、恐ろしい……どうやつてこれだけの若さを保つているんだる……。

「おかえりなのは。あら、そっちの子は？」

「……翡翠刹那です」

「刹那ちゃんね。なのはのお友達?」

「今日お友達になつたんだよ!」

「あらあら、ありがとね刹那ちゃん」

「いえ……お礼を言われるほどじゃないです」

【マスター、そろそろ夕飯の時間した方が良いのでは?】

と、ケルンが唐突に念話で話しかけて来た。

【ん……やうする】

「じゃあ……私はこれで」

「え……帰つちやうの?」

「お夕飯くらいい食べて行けば?」

「わすがにじ迷惑ですし……なのはとは明日でも明後日でも会えるから……」

「迷惑なんかじゃないよつ、ねえ、一緒にいじ飯食べよつよも……」

「うつ……その上田遣いは非常に反則……」

「そうよ? 迷惑なんかじゃないわ」

追い討ちをかけるような桃子さん……。はあ……仕方ない。

「……分かりました。じゃあお言葉に甘ふくさせていただきます」

と一礼。

「うつ言つちやなんだけど、今更ながらに自分で作るの面倒。作れなくはないけどね。

時は進んで夕飯。

田の前には桃子さんと美由希さん、と恭也さん。なのはの言つ通り恐い顔してゐる……。

それを覗けば他愛のない会話の飛び交つ普通の夕食だ。

「そういえば刹那ちゃん、こ両親は大丈夫?」

と、美由希さんのなんて事はない質問。だけど……、

「失踪していないので大丈夫です」

「……は?」

……いや、まあ。亡くなつた、とかならまだしも、失踪したとか  
だったらそんな反応だよね……。

「どつも、祖父母の教育に耐えきれなくなつて失踪したらしいです。

今はどこにいるのかも知りません」

「あー、えつと、『じめん、ね?』

「いえ。兄も先日失踪したので、もうぶつちやけどうでも良いです」

「兄、といつ辺りで恭也さんが反応したけど、まあ良い。  
ていうか……今更だけど凄い家庭環境だな私……。

「おばさん達は?」

と桃子さん。

「アメリカにいます」

「じゃあ……一人暮らし?」

「はい」

……桃子さんまでちょっと暗くなつた。

と、さつきから黙つていた恭也さんが口を開いた。

「……その耐えきれなかつたらしい教育つて?」

「三歳の私を犯罪者しかいない孤島に放り込むような教育です」

「冗談は聞いてない」

「残念ながら冗談じやないんです」

子供に対して随分と棘のある喋り方……は置いといて、さすがに

桃子さんと美由希さん驚いてるな……。まあそりゃそうか。普通三  
歳の子供をそんな所に放り込むわけないし……。

当の恭也さんも、ちょっと驚いている様子。

「……本当か?」

「本当です。基礎的な戦闘技術を教えてそんな所に放り込まれまし  
た。たつた三歳で。それも犯罪者全員倒せ、なんて言うんですけどから、  
意味が分かりません」

これ実話。本当です。

「それで生き残れたのか」

「だからここにいるんじゃないですか」

「……後で道場に来い」

「ちょっと、恭ちゃん！？」

うわー……女の子であることも忘れて私に戦い挑んでくる気だ……。

「相手は女の子だよ！？ なのはと同い年の！」

「強ければ関係ない。それに、お前だって女だ！」

どんだけ強くなりたいんだこの人……。お父さんのこと、そんなにショックだつたのか。

……めんどくさいし、瞬殺しよう。

で、またもや時は進んで道場。

本当に戦わなくちゃいけなくなりました。

一応持ってる武器は双剣、で良いのかな。とりあえずそこまで長くない一本の木刀。

審判は美由希さん。

……とにかく瞬殺。それだけを考えよう。

「じゃあ……」

美由希さんが私と恭也さんを交互に見る。そして、

「始めて！」

……決しました。勝負。

え？ 速過ぎて意味が分からぬ？ 簡単、神速より尚速い、もはや目で追うことすらバカらしくなるほど、なんでものじやないほど、もはや光速じゃね？ くらいスピードで接近して首筋にびしつ、と決めただけ。

ただそれだけだよ？ まあ、この人相手にそんな事出来る人、私くらいしかいないかもだけど。

「…………。…………。あれ？ もう終わり？」

「…………みたいですね」

本当にあつさり過ぎて、逆に意味が分からなくなっているらしい美由希さん。気持ちは分かるよ。

……ちなみに、」の後恭也さんは田を覚ました後お説教されました。桃子さん。

\* \* \*

再び時は進み士郎さんの病室。  
え？ 時間も場所も変わり過ぎだつて？ 気にしちゃダメ。  
一応、今日は遅いから泊まつていけば、って言われたけど、家は  
近いしここ来なきやいけなかつたしで断つた。  
さて、士郎さんだけど……どうしよう。さすがに急に治るのは変  
だよねえ……。

「……世界の改变……開始」

瞬間、この空間が灰色に染まる。

同時に何やら何も書いてない、トレーディングカードくらいのモ  
ニターがいくつも私の田の前に現れた。……扱い方は頭に勝手にイ  
ンストールされている。

「高町士郎さんは、今のが一週間くらいで治り、退院出来るほ  
ど治癒力を持つと定義する」

一枚のモニターを横に弾き飛ばす。ちなみに、定義とか言つてる  
けど、単純にキーワードなだけらしいから、あまり意味はないみたい  
い。

「これらの定義で世界を改变する……」  
パカリ、と、灰色の世界が碎け散り、元の景色へと戻つていった。  
……ん、成功。

「う……」

「あ、起きちゃつ……」

さつ、と窓に枠に飛び移り、飛び降りる。さすがに姿を見られる  
訳にはいかない……。

まあ、普通に着地出来る訳だけれど

「痛ツ……」

今頃痛みがまわつて来たか……。世界の改変の代償。どうも今回  
は、左肩辺りが中から軽く破裂したみたい。血が服に滲んでる……。

「はあ……帰る……」

とぼとぼと、私は帰路についた……。

\* \* \*

なのは Side

せつなちゃんと会つた次の日。お父さんが日を覚ました。  
なのはをふくめ、家族みんなが喜んでいました。お兄ちゃんは、  
昨日のことでお父さんに怒られてたけど……。せつなちゃん強かつ  
たなー、お兄ちゃんを一瞬で倒しちゃうんだもん！

それにしても、せつなちゃんと出会えたことが嬉し過ぎて、つい  
ご飯に夢中になつちやつてお話して聞いてなかつたけど、お母さん達  
とせつなちゃんは何の話をしていたのかなあ。今度聞いてみよ。

そういえば、お父さんが昨日の夜だれかが病室にいた、って言つ  
てたけど、だれだったのかなあ。お母さん達は行つてない、って言  
つてたし、せつなちゃんは病院知らないだろ？し……。うーん……  
だれなんだろ？……。

まあ良いや！ 今日は朝電話して、せつなちゃんとあそびこいく  
約束したから、かえつたら公園にこくじゅんびしなきや……。

Side out……



## 第一話「邂逅したり、します bヨケルン」（後書き）

台詞多いかも……。やつぱり一人称は苦手……。

第三話「戦艦と練習と小学校 b y 刻那」（前書き）

バカみたいに連続投稿。

## 第三話「戦艦と練習と小学校」by剣那

背中のネコ号。

私がヘルから貰つた、えーっと、次元航空艦？ だつけ。そんな感じの名前だつたはず。正しくないなら教えて。

とにかく、私は今その背中のネコ号にいる。一応、外観とか武装の話をした方が良いのかな。

まず外観だけど、ナデシコひとラー・カイラムを足した感じ、かな。その辺は各々イメージお願い。で、艦の名前の通りブリッジの背中？ に、リトルバスター・ズジャンパーの背中にあるネコのマークがある。簡単に言えばそんな感じ。

次に武装。とりあえず対空砲と小型のレールガンが上と下に数十個くらい付いてる。側面には何故かメガ粒子砲ではなく、ゴッドフリート。アーチエンジェルとかのあれね。一応、メガ粒子砲もブリッジの下でちょっと前辺りにある。あとは後部の方にミサイル、デンドロビウムの箱みたいなのがいっぱい詰まつてて、勝手に生産されるらしい。あ、確実に分かり辛いから言いなおすけど、つまり箱が発射されてそこから小さいミサイル（でも火力はバカみたいに強い。しかし何故か非殺傷可能）が百個近く発射される、っていうやつ。

ちなみにナデシコの「」とく、艦の前面が二つに分かれる。あとは分かるよね、グラビティブラストが発射される訳。当然、なのは微妙だけどディストーションファイールドも展開される。ミラージュコロイドも、なんか普通に使えた。宇宙じゃないのに。装甲はとりあえず超ド級対魔力装甲GXとやらで出来てているらしい。プレシアさんの一撃も防げるんだって。きっと凄いんだろう。うん、凄いんだろう。それ以外どう反応しろと？

あ、それと何故か知らないけど、相転移エンジンが積まれてる。いや、当然なのかもだけど、真空扱いされてるみたいで、フル稼働

出来るんだよ。あの女神様、妙な改造してくれる。助かるけど。

更に更に、ほんつとうに何故か知らないけど、ボソンジャンプが可能。A級ジャンパーがないのに。ディストーシヨンフィールド張つてなくても誰も消えない、という意味の分からぬジャンプ。一体どうやってるんだろう……。

システム面とその他面に突入します。え、微妙にもう入ってる? 気にしちゃダメ。

A.I.が搭載されます。なんか、オモイカネとネコつて名前の謎のA.I.が。前者は分かるど後者は何者? 背中のネコ号なんて名前だからいるの? でも最近発覚したけど、結構高性能なA.I.みたい。もしかして、ここにルリがいたら、ナデシコより無敵になれるんじゃないだろうか。

さて、なんで格納庫があるの? と思つて来てみたら エステバリスカスタムとか、ブラックサレナとか、コロニー製のガンダムとかがありました(笑)。

いや、もう笑うしかないから……。これのためのバイロットとして、コロニー製のガンダムにはウイングゼロカスタムに棗恭介、ヘビーアームズカスタムに理樹、デスサイズヘルに鈴、サンドロッグに謙吾、ナタクに真人が指名されていた。……何故。

ていうかデスサイズに鈴が一番疑問。サンドロッグは百歩譲つて剣だから良いとしよう。一刀流だけど。でも何故にデスサイズに鈴? 意味が分からぬ。本当、あの女神様は何を考えているんだろう。

ウイングは……中の人で選んだとしか思えない。いや、きっと強いんだろうけど。

ナタクは一番格闘戦っぽいから真人なのかな。ヘビーアームズはきっと消去法でも使われたと思う。もしくは沙耶ルートのとき銃を使っていたからか。

エステバリスには、こっちの方が意味分からぬんだけど、サンペントテール+ジャンク屋が乗つてました。はい、ガイさんとか口

ウさんとかですね。本当に意味不明。

まあ、何はともあれかなりの防衛力。だというのに、機体は追加可能らしい。過剰防衛？

あ、言い忘れてたけど、全部非殺傷設定が可能らしいよ。技術つて凄いね。

ふう。まあそんな話は置いといて。

なのはと遊んで家に帰つて背中のネコ型に来た私は今、モビルスーツが暴れても大丈夫なほど広いシユミレーションルームにいます。え、そんなに広いのかって？ 少なくともアースラよりは広いよ？ 単純に技術の差だよ。よく分からぬ物を使って空間を広くしているらしい。だから本当はアースラのくらいしかないので、その数倍くらいの広さになつてている、つていうこと。終わつたら元の広さに戻るみたいだけね。

さて、何故私がそんな所にいるかというと……。

「ん……とりあえずこの無印では、レーヴェとレンで進めるから、ユニゾン、及び非ユニゾン状態での戦闘訓練」

つまり、私はこの世界の魔法に慣れる、ユニゾン状態の感覚を確かめる、などなどで、目の前にいるレーヴェとレンは、ユニゾン状態の感覚を確かめる、その状態の戦闘に慣れる、非ユニゾン状態での単独戦闘の訓練、とかをする訳だ。

あ、それと、レンは今私と同じ年、レーヴェは……十歳くらい？ 多分そのくらい。

更に、この二人に限らず、みんなデバイスを持っているらしい。もう大戦力だよね……。ユニゾン時は私のケルンと同化するらしいけど。

「じゃあ……まずはレー・ヴェとユニゾンしてみる」

「分かつた」

「レンはどうすれば良いのかしら」

「あそこに模擬戦用の機械人形があるから、それ使って訓練。難易

度はお好きに』……』

『ふうん。退屈しないで済めば良いけど。ぶつ壊しちゃって良いのよね』

『お好きに』……』

まあ、壊されてもあとで勝手に治る変な機械人形みたいだし、特に気にする事もない。

『「ユニークン・イン！」』

言つと同時に、何だか目線が高くなつた気がした。あれ、なんかバリアジャケットも変わつてゐる？ まるでレーヴェみたいな感じに……。

『つい……私の面影が全くないんですけど……』

『どうやら、ユニークンしたやつと同じ外見になつたんだな。身長も變化してくる』

ちなみに、ユニークン状態の時は、中と外、つまり身体を動かす方が変えられるようですが

『私が動かすか、レーヴェが動かすか決められるってこと……？』  
そういうことです。ユニークンした方が能力とかもあげられているので、その状態でレーヴェが戦つも良し、マスターが戦つも良し、とにかくことです

『……リインとかのユニークンデバイスとは全然違う』

『だが、便利ではあるぞ』

まあ、確かに便利といえば便利かもね。私にとつて苦手なタイプは、レーヴェ達にとつたら得意かもしないし、レーヴェ達が苦手なタイプは、私にとつたら得意かもしれない。そういう場面場面で、入れ替わるのは便利というか、かなり有利な戦いを出来るかもしない。

『さて、一応俺とのユニークン時に使える魔法を確認しておくだ』  
ユニークンすると私の魔法と同時に、レーヴェ達の使う魔法が使え  
つていうかクラフト

『俺の場合は冥皇剣、鬼炎斬、零ストームにシルバーソーン、アースガードに分け身、あとはD・ファントムの技だ』

「AAキャンセラーとか?」

『そう。どうも俺の魔法としてインストールされていいるらしい』  
結構ズルい気がするんだけど……。

『当然だが、AAキャンセラーも零ストームも魔法のキャンセルは出来る。たとえ発動していてもな』

「巻き込めば消える、つていうことでいい……?」

『ああ、問題ない』

幻想殺しの広範囲版かよ……つて言いたくなる。

『アースガードは当然だが重複は出来ない。そのかわりなんだろうと確実に防ぐはずだ』

「相変わらずの鉄壁……」

『俺に関しての説明は以上だ。質問は?』

『回復系は? 確か持つてた気がしたけど』

『刹那が持っているはずだ。導力魔法は使えるんだろう?』

「うん……。分かった、もう質問はない」

『じゃあ 始めるか』

向こうでレンが最高難易度の傀儡戦に、何気に苦戦している中、こつちは初級で始める。嘗めてかかるから大変なんだよ、レン……。

「じゃあ 鬼炎斬!!--」

\* \* \*

さて、説明は必要だらうか。

一応、一通りの魔法は試してみた。レー・ヴェのD・ファントムのを含めてね。

鬼炎斬は一瞬で機械人形吹き飛ばしたし、冥皇剣は当然のゾンビく。

零ストームとAAキヤンセラーは本当に魔法を消した。シルバーソーンは、何故か機械人形ですら混乱させてたし、ハイパー・アームショットはディバイン・スターがスター・ライト・ブレイカーに近づいた感じの砲撃だった。ハイパー・レーザーは普通にレーザーが出た。まあそんなところ。他にもあるけど、ちょっと面倒なので省く。

「で、レン大丈夫……？」

「はあ……はあ……だ、大丈夫よ……。れ、レンがあれくらいで……疲れるわけないじゃない……っ」

いや、確実に大丈夫じゃない。どう考へても大丈夫じゃない。「えーっと、レンとのユニゾンはまた今度にする?」

「いーやつ! レンは大丈夫だからさつさとやりましょう!」

「でもレン、疲れてる」

「レンは疲れてないッ!」

どんだけ負けず嫌いなのレン……。仕方ない、じにはそういうことをしておくれ。

「分かった、レンは疲れてない、元気ハツラツ、OK?」

「OKに決まってるわ」

「じゃあ……行くよ。レー・ヴュはレンと同じく機械相手にして」

「分かつていい。じゃあ、レン、あまり無茶はするなよ」

「分かつてるわ。まあ、レンにとっての無茶なんでものが、どれほどあるのか知らないけど」

「「ユニゾン・イン!」」

ピカッ、と視界が光ったかと思うと、まあ言つまでもなくレンになりました。

「本当、フリフリなドレスだねえ……『ゴスロリ、で良いんだっけ?』

『じゃあ、レンの魔法を教えちゃうわよ?』

「ん……お願い」

『レンの場合は、ブラッドサークル、カラミティスロウ、カラミティブラスト、クロックダウン、レ・ランディング。あとはパテル=マ

テル呼んだり、機巧魔神アスラ・マキーナ 神呼んだりってところね

ちゃんとそれは付いてたんだ、よかつた……。

ちなみに、あとで聞いた話だけど機巧魔神は虚数空間でも動けるらしい。さすがだよ……。

「じゃあ……始めよう」

『うふふ 今度はすぱつと、殲滅するわよ』

ああ……やっぱり苦戦してたんだ。

で、また時間は飛ぶ訳だけど。

一応説明しておくね。ブラッドサークルは大鎌、つまりネメシスリップに薄い魔力を纏わせた上で、回転しながら薙ぎ払っていく魔法。これはなんか発動したまま普通に移動出来たから、結構使えるかも。

カラミティスロウは、ネメシスを投げるんじゃなくて、振ったら鎌状のがブームランみたいに飛んでいた。魔力刃が飛んでいったみたい。

カラミティブラストは時空に亀裂をいれて、不可逆の力で敵を擊つ、つてやつだけど、それを零距離で撃つたら機械がぐしゃぐしゃになつてた。

クロックダウンは、バカにしてるのか？ つてほどに遅くなつたし、レ・ランデスは、引き寄せ効果の場が出来て、「ウモリと一緒に突撃して一閃する、まあゲーム通りな魔法だった。引き寄せ効果は結構強いみたいで、機械人形は全然動けてなかつた。固まつた敵にかなり有効だね。

さて、機巧魔神は白銀を出して終わつた。本当に空間を切断してたよ……。

とりあえず他の機巧魔神は、今度にする事にした。  
で、パテル＝マテルだけ……。

スターライト・ブレイカーの極太砲撃が一つ飛ぶような一撃を放つてくれやがりました（笑）。

いや、よつなつていうより本当に飛んだんだけどね。ダブルバスターキヤノン、だけ。スターライト・ブレイカーよりオーバーキルだよ……。ぐしゃぐしゃなんてもんじゃなくて、消滅してたもん。まあ、そんな感じで終わった訳です。

ちなみに、レーゲは上級のコースで楽勝、とまでは行かなくても、苦戦はしなかつたそうな。

今度は最高難易度もやってみたいそうです。

そんな訓練も終わり、とりあえずユニゾン陣に会つてみよう、と思つたんだけど……。

凄いいっぱいいた。

えーっと、簡単に言うと、遊撃手の方々だつたり元遊撃手だつたり特務支援課だつたり聖杯騎士だつたり冒険家だつたりその他もろもろ……とにかくいっぱいいた。まあつまり、執行者 + 3rd の方々 + 零の方々 + イース VS のイース陣つて考えてくれば楽かと。いやー、これでみんな魔力SSだからね。過剰戦力なんてもんじやない気がする。

何人いるのかは面倒だつたから数えなかつた。つていうか、全員とユニゾンなんて絶対しないと思うんだけど……。

あ、分かつてるとと思うけど、みんな服は同じでも歳はゲームよりも若いからね？

\* \* \*

さて、今私は七歳。え？ いい加減慣れたけどさすがに飛び過ぎ？ 日常は変わらないよ、なのはと遊んだり訓練したりのんびりし

たりしてただけだもん。

あ、当然士郎さんはあれから一週間で退院しました。お医者さんも驚いてたみたい。

まあ良いや。とにもかくにも、今私は私立聖祥大附属小学校の入学式にいます。と、いうより、壇上で喋ります。

迂闊だった。つい、「簡単……」なんて調子のつてオール満点なんてとつてしまつたばかりに、こんな所で喋らなくてはいけなくなつた。だつて私、中学一年生にして大学卒業くらいの勉強やらされてたんだもん……、楽勝過ぎてついつい……。

まあ、心にもないことしか喋つてないからいいけど

で、入学式が終わつて、クラス発表とかに田を通してる訳だけど、「せつなちゃん！ 同じクラスだよ！」

「うん…… よかつた」

まあ別に、別のクラスでも友達として終わる訳じゃないから良いんだけどね。でも同じクラスであるのに越したことはない。

あ、当然だけどアリサとすすかもいる。まあまだ友達フラグなんて立つてないので、話しかけたりする必要もない。

一度目の小学校生活。ん、楽しみだ。平和な学校生活つていうのはどんなものか、この日で確かめさせてもらおひ。

第三話「戦艦と練習と小学校 by 利那」（後書き）

ふう……レンとレーヴンの喋り方、あんなのによかつたかな？

## 現状の設定集

はいおはようございます、こんにちわ、こんばんは、おやすみなさい。レン・バレッタです！

一日に連続投稿しまくつております！

まあ、仕事がたまつてて、先にこっちをいくつか投稿しておいつ、という考えなので、ご了承くださいな。

さて、サブタイトルの通り、現状の設定集です。

一応目次みたいなものを書いておくと、

- ・主人公「翡翠刹那」の現状
- ・デバイスの設定
- ・その他キャラの設定
- ・背中のネコ号の設定
- ・スペル・マジックの設定

つていう感じですかねー。

あ、設定なんて完全把握しててるぜー。という方は、回れ右していただいて、本編の更新をお待ちください。まあ、ちょっとした細かいところまで書いてるので、読むに越したことはないと思いますが。

では、始めますよー。

## 主人公「翡翠 刹那」

R O D S その1の主人公。前世では、スペル・マジック四大名家の一つ、翡翠家の一人娘だった。父親に種がなかつたことが原因で、正規の手順で授かつた子供ではないため、正確には人間ではない。刹那にはある特殊な永続魔法がかけられている。現在の本作品では正体不明。しかし、発動すると同時に副作用があるらしいことと、最高神の魔法を人間の出来る限り再現した物らしいことから、女神ヘルですら、それを改変することが出来ないほど強力なものだ。

左腕には、殲滅機械 爪という物が装備、というより組み込まれているらしい。取り外しは現状出来ない。まだ分からぬが、おそらく非殺傷は不可能。

外見は前世と同じ。背中まである銀髪に、琥珀色の瞳。

前世では中学二年生まで生きていたが、発育はそれほど良いものではなく、身長は145・27センチ、胸は周りはB、ないしごばかりであったが、彼女はA止まり。その分体重は軽く、身体の線は細め。ある意味スタイルは良い。が、前世での状態を見る限り、成長に関してはそこまで期待出来ないかもしれない。高校生くらいにまでなればもう少し成長するか。

世界改変の力を持つ。これを使うと、基本的になんでも出来るが、改変の規模と数によつて刹那自身に負荷がかかり、体内から破裂して出血、などの怪我をする。例は第二話。

リリカルなのはの魔法、導力魔法、スペル・マジックが使える。  
ガードスキルが使える。  
魔力光は銀色。

## リリなの魔法

- ・ライジングバレット（Rising Bullet）

ホーミング性能を持つ魔力弾。「バースト」のコマンドで、一発一発が拡散して散弾のようになる。その状態だと、ホーミングはオートになり、制御は不可能。現在一氣に使えるのは五発。

・ルナティック・バスター（Lunatick Buster）  
瞬間的小型集束砲撃魔法。ケルンバイター＝スペル・ロッドモード時に、先端に円形魔法陣が現れ、そこに魔力が集束、小型の集束砲が放たれる。威力はティバインバスターを少し落としたくらい。移動しながら集束出来る。

・ディメンション・ブレイカー（Dimension Breaker）

ぶつちやけSLBと似たような物。違うのは三点同時集束であつて、つまりダブルバスター・キヤノンがトリプルバスター・キヤノンになつたような物。威力は折り紙付き。

ケルンバイターのおかげで、デバイス内で魔力を集束、なんてふざけたことが出来るらしく、当然移動しながらのチャージが可能。周囲の魔力も一応集めるが、基本的に刹那魔力を主に集束する。その分、三つも撃つから魔力消費がかなり激しい。SSSの一倍といえ、SSSを一〇〇とし、その一倍だから一〇〇。その一〇〇あるうちの五〇は使う訳だから、精々連続で使っても四発が限界。それでもかなり脅威ではある訳だが。

・プリベンター（Preventer）

防御バリア。防御力は高めではあるが、受けるより、流すことを考えた防御魔法。移動が可能。

・カイト・シールド（Kite Shield）

二層のラウンドシールドと考えると楽。

・セイバー・バインド (Saber Bind)

対魔力仕様の剣型のバインド。スペル・マジックの理論を応用しているらしく、抜け出すには混めた魔力を上回る魔力をぶつけるか、時間をかけてブレイクするしかない。

相手の足下に魔法陣を出現させ、上空から剣が十数本落ちてくるという辺り、スペル・マジックの面影を感じさせる。ちなみに魔法陣は相手の動きを遅くする効果を持っているらしい。レンのクロッカダウン的な物だと思われる。

・リボン・バインド (Ribbon Bind)

チェーンバインドがリボンになつただけ。

・バリアジャケット

白いマントに黒いジャケットと膝よりちょっと上くらいのスカート。裾に白い線。胸には銀の胸当てが取り付けられている。手には指先だけ出るグローブ。足は銀色のブーツ（ヒレメンタルジェードを知っている人は、レンのはじてるブーツをイメージすると分かりやすい）。マントの肩の部分には、縁が黒くて中が白い小さな盾が付いている。ぶっちゃけワルクラにその内出てくる服。

### 刹那のデバイス「ケルンバイター」

レーヴェのデバイスは『ケルンバイターX』。刹那による愛称はケルン。レーヴェは普通にケルンバイター。

数十個ものモードを持つという前代未聞（？）のインテリジェントデバイス。現在自分自身の性格をどのように向けようか模索中の様子。その内キャラくなつたりツンデレになつたりするかもしれない。一応、性別は男性のようだが、彼の最終的な性格によつては性転換するかもしれない。

高性能では收まりきらないほどの性能を秘めていると推測される。下手したらロストロギア指定される可能性も……。

ちなみに、ケルンバイターメは、高性能ではあるが、刹那の物ほどではない。

### ニゾンデバイス「剣帝 レオンハルト」

ゲーム「英雄伝説 空の軌跡」シリーズに出てくる結社「身食らう蛇」<sup>ロス</sup>の執行者<sup>ノ・・?</sup>。魔力光は、髪色と同じアッシュブルonden。愛称はレーグ<sup>エ</sup>。

魔法キャンセル、なんてふざけた効果を持つ魔法や、砲撃魔法、近距離の強力な魔法などを持つ、最強の域に足を踏み入れている人。<sup>テ</sup>『剣帝』の名は伊達ではない。

使用魔法は黒騎士とロ・ファンтомの物（何度も言つがクラフト）。

現在おそらく十代後半くらいだと思われる。

### ニゾンデバイス「殲滅天使 レン」

空の軌跡SCから登場する、結社の執行者<sup>ノ・・?</sup>XV。ゲーム内では3rdで一二歳。現在は刹那と同じ年。魔力光は髪色と同じ紫色。一人称はレン。

ゲームでは大半の技が即死付きという本当に一二歳なのか？と疑いたくなる少女。今作品でも、即死はないが、かなり強力な近距離魔法、というより本当にクラフトとしか言えない魔法を使う。遠距離魔法はない。パテル＝マテルを魔法の中に入れるなら、ダブルバスター・キヤノンがあるが。

本来は呼べないが、刹那がヘルに頼んだことで、機巧魔神<sup>アスラ・マキナ</sup>

が呼べる。ちなみに刹那が知る限りの数で、全部出すことも可能。  
機巧魔神は、虚数空間でも動けるらしい。

武器は大鎌、名称はネメシスリップ。基本的にレンは「ネメシス」と呼ぶ。

### 次元航空艦「背中のネコ号」

名前は刹那の思いつき。

過剰防衛としか言いようのない防衛力を持ち、宇宙でもないのにミラー・ジココロイドが使えたり、真空じゃないのに相転移エンジンがフル稼働したりするチート艦。

ついでに過剰武装。悪い言い方をすると、小さな子供が考えるような戦艦。

### 武装

- ・ 対空砲、小型レールガン
- ・ マイクロミサイル（箱から出るあれ）
- ・ ゴットフリート
- ・ メガ粒子砲
- ・ グラビティブلاست
- ・ （刹那は実は知らないが）？？？及び？？？

## スペル・マジックの設定

『スペル』と呼ばれる単語の配列によって発動する魔法。

同じスペルを扱っていても配列が違えば違う魔法が発動する。スペルの数が多いほど上位の魔法が発動する。発動のために必要な力は、魔力。リリなの魔力とは別。

防御魔法、及び一部の魔法にはスペルがない。

殺傷能力がない。

スペル無しでも魔法は発動可能。その代わりに使用魔力がスペルありの時の五倍。

ちなみに、スペル・ロッドという機械がないと発動出来ない。

さて、いかがですか？ 細かい設定、とか言つておきながら軽いネタバレを含んでいますねー。刹那の魔法とか。まあ、その辺はまだ許容範囲つて事にしておいてくれるとありがたいです。

ではでは！ 今日の連続投稿はここまで！ 明日は投稿出来るかは分かりませんが、とりあえず頑張ってみますよー！ じゃあ、現状の設定集でした！

## 第四話「ウロボロスではないが結社だ ピヨレーヴ」

帰宅途中。

私達は誘拐されていた。

……まあ理解出来るの方が多いと思うけど、一応説明しておくね。

かの友達フラグが立つて以降（私は離れた所で傍観していた）、アリサとすずか、なのはと私の四人で下校するのが普通になつていだ。当然屋上でお昼を食べたりもする。

で、アリサとすずかはえーっと、バニシングス家と田村家？ のお嬢様で良いのかな？ まあそんな感じで、巻き添えといったらあれなんだけどなのはと私を含め、四人は誘拐されていた。よく分からぬ黒ずくめの男の人に、黒い大型車に乗せられて。

「へつへつへ、上手く行きやしたねえ兄貴。おまけもついてやすけど」

「家への連絡はどうなつてるんです？」

「俺達が到着し次第、だ」

「じゃあ来るまでの間、こいつらで遊んじゃつても良いんですねかい？」

「ご令嬢お一人はダメだ、が、おまけなら好きにして良い」「ちえー、まあ良いや。どっちも結構可愛いしなあ？」

「ひつ……！」

犯人の一人がこっちを変な目で見て來た。なのははかなり怯えていたが、私はどうでもいいと心の中で思いつつ、恐がつてゐる振りをしていた。悲鳴はあげなかつたが。

【ケルン、背中のネ口号に連絡は？】

【”警察”が向かうそです】

【ん、分かつた】

まあ、誰だらうと魔法も何も使えないこの連中に負ける訳はない

と思つけど。

「『めん』一人とも……巻き込んで……」

「『めんね、なのはちゃん、刹那ちゃん……』」

「う、うん……大丈夫……」

「友達だから……気にしないで」

と、いうより、私が油断していたというのも原因の一つだけだ。

ぶっちゃけこの程度の連中なら素手でも勝てる。魔法なんて使わなくともね。そもそも恭也さんよりも弱い連中に負ける訳がない。多数対一だつて何回かやつたことあるし。

でもかなり油断していた。まさか三人と話すのが楽し過ぎて背後からの襲撃に気付かないなんて……。

残念なことに繩抜けなんて芸当は私には出来ない。魔法が使えば簡単なんだけど、さすがに見られる訳にもいかないし……。

なんて思考をしている間にどこかの倉庫にたどり着いた。

すると、私達は縛られたまま男達に抱き上げられ、倉庫の中に連れられる。……ていうか抱ぎながらお尻触つてくるな』のロリコン

……！

ドサッ、とベッドの上に放り投げられる。どうもこの連中、ここを根城にしているのか、ベッドやら机やらが置かれ、ゴミも散乱している。中にはさつき乗っていた男達四人を含め一〇人くらい。中にいた六人はみんな肩にマシンガンを引っ掛けている。

「上手くいったようじゃないか」

「ああ、周りには誰もいなかつたしな」

幹部っぽい厳つい男二人が笑いながら話している。ていうか、ス

キンヘッドでグラサンつてマフィアっぽいと思わない？

「で？ おまけ一人でなら遊んじゃって良いんすよねえ？」

「好きにしろ口りコソ。つたく、子供で遊ぶの何が良いんだか」

「未発達な子供だから良いんすよー、成人してるのじやもう熟しちやつて……」

「へーへー、お前の子供好きはみんな知ってるよー。ほら、他の

連中も遊びたきや遊べー」

と、四、五人の男達がこっちに来る。

……私は良いけど、なのはまで襲われるのは非常にムカつくな。いつそのこと世界の改変でも使ってしまおうか。それとも魔法使ってから後で記憶を。

「大丈夫だよお嬢ちゃん？ 痛くしないから。ういっひっひ

気持ち悪……なんて思っていた瞬間。

小さな悲鳴を上げて一人の男が倒れた。

「な……！ 誰だ！！？」

そんな事を言う間にもう一人、更に一人と倒されていく。

「クッ、どこだ！」

「何言つてんだよ？ お前の後ろにいるじゃねーか

「ツー？」

ガチャリ、と首筋に黒い何かが突きつけられる。銃ではなく、機械的なハルバード。いわゆるスタンハルバードというやつだ。三木さんボイスな彼は、ランディ。ランディ・オルランド。

「くつ……てめえ！！ ぐあっ！」

「……後ろ、気をつけた方が良いです」

そして、魔導杖なんて大層な物を持って来たのはティオ。と、なんか突然手を縛つっていた繩がほどかれた。

「助けに來たよ、みんな」

いつ居たんだ……と言いたくなるこの美人はエリイ。ていうか、てっきりロイドが来ると思つてたんだけどなあ。さつき氣絶させてたの射撃つぽかつたし。

「何者だよ……てめえら」

ランディにスタンハルバードを突きつけられている幹部が言う。

その間に他の男達は倒されていた。倒れた男達の中心にいる一人の青年。……ではなく、少年。彼はまだ一二歳です。ちなみに後ろにいるエリイも。まあ、ティオなんて八歳だけど。あ、ランディは一五歳くらい。

そんな少年、ロイド・バーニングスは言ひ。

「”警察”だよ」

\* \* \*

それから一〇分後、ロイド達が帰ると同時に恭也達が走つて来た。士郎さんやら忍さんやら鮫島さんやらも当然いる。何故かその後ろからパトカーがやつて來た。……普通逆か一緒にじやない？

「なのはー、よかつた……！」

「すずか……！」

「アリサお嬢様……遅れて申し訳ございません……」

「刹那ちゃん、無事でよかつた！」

上から恭也さん、忍さん、鮫島さん、士郎さんの順。

と、恭也さんが、

「刹那……責めるつもりはないが、お前が付いていながらなにやつてんだ」

「すいません……会話が楽しくって、油断してました……」

「恭也、もう良いわ。彼女もまだ子供ですもの、常に油断しないなんてことは出来ないわよ。いくら恭也より強くてもね」

「分かつてるよ、だから責めるつもりはないって言つたら？」

そうやって笑いながら会話をし、適当に事情聴取を済ませて帰る。ちなみに、ロイド達の事は内緒だよ。私が、気を失つて気がついたら犯人全員が氣絶していた、つてことにした。

士郎さんは相変わらず今度試合しそう、なんて言つていたけど、適当に誤魔化した。

みんなと別れ帰宅する。あー、なんか疲れた。と、言ひ訳でお風呂に入ろう。

お風呂を湧かすのも面倒なので、背中のネ<sup>ノ</sup>号に行き温泉に入る。え？ 何で戦艦に温泉があるのかつて？ そんなのアークエンジンに聞いてよ。あつちだつて天使湯だかがあるでしょ。

ちなみに、今私と一緒にレンとティオが温泉に入つてます。

「ふう……」

「はあー……生き返るわねえ」

「ですね……」

子供三人、ゆつたりと温泉につかる。どんな技術を使つているのやら、露天風呂みたいな感じになつていて、夜空が見える。当然、お風呂も柵一つで遮られていて。一応、向こうにはレーヴェとロイド、ランディが入つていてるらしい。

会話を聞く限り、一応会話は三人で行われているようだ。ちょっと安心。

「ねえ刹那ー、今日もレンの新記録を出したのよー 機械人形も

対した事ないわねー」

言つているのは最高難易度の機械人形模擬戦。最初はかなり苦戦していたが、最近ではちょっとずつ苦戦しなくなつて来たらしい。システムも、同じ難易度の強さも日々更新されているため、さすがの天才も一気に余裕とまでは行かないけれど、毎日新記録を出しているようだ。

ちなみに、記録とは全滅完了時間の事。

「さすがレン……」

「……他の最高難易度挑戦者は、まだまだですけどね。一応、今の所最高難易度挑戦者で最高記録を出しているのはレー<sup>ヴ</sup>ュさんです。まあ、分かりきつているかもしませんが」

それは当然だろうね。剣帝の名は伊達じやない、ってことだ。

「刹那もやってみれば良いのに、機械人形模擬戦。執行者と匹敵す

るくらいの実力くらいは持つていいじゃない。レンと互角くらいには出来ると思うわよ？」

「面倒……訓練なら別のだつてあるし、この世界の魔法を作つたりもしなきゃ……」

「一応、いくつか出来たけど、バリエーション、派生系が作れないか考えたりもしているのだ。」

「ふうん。まあ良いわ、別に訓練方法なんて人それぞれだしね。レンはバカみたいに強制させたりしないし」

「……じゃあ誰かは強制させたりするの……？」

「Hスティル達よ、まつたく……ニンジンは嫌いなのに無理矢理食べさせようとするんだから……」

「親が子供の好き嫌いを直そうとするのは当然だと思いますが」「それは分かるわよ。でも限度つて物があるじゃない、いくらなんでも羽交い締めにしてまで食べさせようとしなくとも……」

「……そんなにニンジン嫌い？」

「嫌い。食べたいなんて思わないわね。あんまり美味しくないし。でも、一応力レーとかに入ってるニンジンは一つくらいは頑張つて食べてるのよ？ ちょっとくらい褒めてほしいわ」

「嫌いな物を食べるのは確かに頑張る事ですが、それで威張られても困ります」

「威張つてないわ、胸を張つてるだけよ」

「ない胸を張つても惨めなだけです」

「ティオだつて無いじゃない！ レンより年上なのに！」

「私はまだ発展途上なだけです。たかが八歳で胸がない、なんて言われても困ります」

「レンだつてまだ五歳よ！」

「なのでない事を気にして仕様がないですよ」

「自分で言つておいてそれ言つー？」

平和だね。実際に平和だ。レンもティオも元気だし、向こうは全然

氣にしてないみたいだし。うん、非常に平和だ。

男湯

と、新たな温泉のお客さんがある。

その正体は……ティータだった。子供だらけだね。  
しかし、目的は温泉ではなかった。

「刹那ちゃん！ ヨナくんがちょっと話があるって！」

「ヨナが……？」

「ヨナはパソコンを使つていろいろ遊んだり、情報収集したりして  
いたみたいですから、何かしらの情報でも掴んだんじゃないですか  
？」

「ん……分かった。すぐ行く」

私は温泉から上がって、何故か付いてくるレン達と一緒にヨナの  
所に向かつた。

ヨナはパソコンの前のイスにふんぞり返つていた。

後からレーヴューやロイド達もやつて来たのを見ると、

「おせーぞ！ 何やってたんだよ！」

「つるさいですよヨナ。こっちも一応は急いであげました」「  
あげました、つて何だよ！？ セっかく情報提供してやるうつて  
のに！」

「私に落ちゲーで勝てたら、謝つても良いですけど」

「へん！ 言つたな？ よつしゃ、さつさとやるぞー！」

「先に情報を下さい。ゲームなんていつでも出来ます」

「ぐぐぐ……まあ良い。とにかくこれを見な」

ヨナが指差すパソコンの画面には、何やら研究データのような物  
が並んでいた。それはどれもこれも人体実験のデータ。そつ、子供  
達を使った。

「ツー！」

「これは……！」

レンとティオが顔をしかめる。

「こんな……こんな教団まがいの事を……！ クソッ！ „樂園“

の子供達や、レンとティオみたいな被害者達を作るよつた連中がこの世界にもやつぱりいるのか！！」

「ロイドさん……」

「落ち着けバニングス

「レーヴュさん！ これが落ち着いてなんていられませんよーーー」「バーク、だからこそだ。今は歯あ食いしばってでも気持ちを抑えて、その気持ちをこの連中にぶつけてやれ、ってことだよ」

「ランディ……すまないヨナ、続けてくれ」

言われてヨナはパソコンを操作しながら、話を再開する。

「これを見つけたのは本当に偶然だったんだけど、こんな見ちゃアンタらが黙つてないだろうと思つてな。ほら、詳しい情報の他に場所も見つけといたぜ」

「これは……ふうん、時空管理局の闇の部分、ってことね。レンもたまにその片鱗を目にはしていたけど、ここまでとは思わなかつたわ。やつぱり、完璧な正義の味方なんていないわね」

「酷い……みんなを守るための組織のはずなのに……こんなの酷いよつ！」

「ティータ・ラッセル、どこの世界にもこんな連中はいる。いつも言つてはなんだが、いちいち気にしていたらこちらがもたない。が、そう感じる心は大事にしろ」

「レーヴュさん……」

「D G教団然り、この時空管理局とかいう連中然り。まったく、人間つてやつはどうしてもこんなに腐つてやがるのかねえ……虫酸が走るぜ……」

みんな思いついに怒りを露にしている。かくいう私もだ。管理局がそれなりに黒い組織だとは分かつていたけど、ここまでとは思わなかつた。

……必要だ。管理局のような表だけの正義の味方よりも、表裏のない正義の味方が。

そんな考えを呼んだかのように、レーヴュが、

「まずは行動だ。どうする、刹那

みんなの視線が私に向く。

どうする？ そんなの決まってる。いや、それでもあえて聞いたんだ。レーヴンは。

「潰そう。そして、子供達を保護する」

「了解した」

「ふふっ、まあ刹那ならそう言つと思つてたわ」

「もうこれ以上、私のような被害者を生む訳にはいきません」

「はいっ！」

「ああ。今でこそ違うが、特務支援課として、何より人間として、こんな奴らを放つてなんて置けない」

「そういうこつた。俺達もその話に乗るぜ」

みんなが笑顔で頷いてくれる。

よし。

私は部屋の入り口にある受話器を取る。

「全員、ミーティングルームに集まつてください……重大なミッションについての説明が行われます。繰り返します」

\* \* \*

ミーティングルームには、リトバスマンバー、パイロットメンバー、ユニゾン陣、そして私が集まっていた。

当然ではあるけれど、今回ヨナによつて発見されたこの人体実験施設の事をみんなに説明したら、全員激怒していた。他の執行者の連中もね。

それで私は、管理局とは別の正義の味方の組織を作りたい、と言つてみんな賛成してくれた。

さて、大体の説明やらは終わった。

これからもしかしたらこういった子供達が増えていくかもしれない。いや、おそらく増えていくだろう。その子たち全員をこの背中のネコ号に保護するのは難しい。

と、いうことで、背中のネコ号の拠点とも言える巨大な都市要塞を作る事にした。

とりあえず、女神様のヘルに、そのための人員（仕様がないのでいろんなマンガやらゲームから持つてこさせてもらった）を要求、普通に通った。ついでと言つてはなんだけど、能力追加の一つめとして、ロボットの能力とか武器（三個まで、とか言い出したので、キングガイナーとウイングゼロのオーバースキルとゼロシステム、ガンダムのフィンファンネル）を貰つた。

そんなヘルとの通信、実は約三秒。

よし、準備完了。

「これより、私達背中のネコ号は『結社』フエンリル（仮）を名乗る、偽善だうとなんだろうと正義の味方をする。意義がある人は……？」

「…………いない。

「では、私達『結社』フエンリル（仮）のファーストミニシヨンとして、管理局人体実験施設殲滅作戦を開始します……！」

「「「了解！」「」」

\* \* \*

Side No

どこぞの無人管理外世界に、その施設はあった。

開発した薬の実験、能力開発実験などなど、どこからかさらつて来た子供達を使い、そんな違法実験をやつていた。

今までに一体どれだけの子供達を殺して来たのか。そんな事は、この施設の研究員にはどうでも良い事だった。所詮は数の話、そんなものを考えるよりも、今日の前の実験をどうすれば成功させられるかが問題だ。

子供達はもはや抜け殻ばかりだつた。

精神なんて物がぽつかり抜け落ちているとしか思えない目をする

子供が痛いはずなのに甘い懸鶴が受けない子供すらいた。

また心を保てていらるる子供も、たゞ少くないで来た

かつたが。

そんなある日の事だ。突如として研究所に警報が鳴り響いた。

研究所のどこからか爆発が起ころる音が轟く。

研究員の誰かが何か叫んだが、そんなものは聞こえなくなつた。

突然倒れたのた

「……正直、全員殲滅したいくらいだわ。でも、そんな事をすれば、あなた達みたいなのと一緒にになつてしまつもの。だから 気絶だけで済ませてあげるのよ？ レンに感謝してほしいわね」

「投降など」という選択肢は与えんぞ。悪いが、全員今ここで

「まだ甘いぐらいいだ」  
ちらひ。起きた時には牢の中だらうが、貴様らの罪に比べればまだ

「せやなあ。お前らのよつた外法は久しぶりや。まあ、俺はもう守護騎士やないし、外法狩りなんて一つ名も持つてへんからなあ。残念やわ」

「…………みんな、子供達は救出完了。あとほんの少しある奴らだけ  
「了解よ。…………一つは考えておきなさいよ?」

「お、お前らは何者だッ！？」

研究員の一人がそんな事を言い出した。

研究員の一人がそんな事を言い出した  
そんな彼を特に気にした様子もなく、ただ一人の少年と少女が  
告げた。

「今はもう違うが、あえていつか乗らせてもらおうか。《結社》身<sup>ウ</sup>

食<sup>ロボロス</sup>う蛇、執行者<sup>ノ</sup>。？」。《劍帝》レオンハルト」

「同じく《結社》の執行者<sup>ノ</sup>。？」××、「殲滅天使》レン。覚えておいて損はないと思うわよ」

「他の連中はまだノ。·やら何やら決まつとらんのや。だから勘弁してや、俺らは名乗れへん。だから今は」

「……その一人の名前だけ覚えて、黙つて氣絶してて

瞬間、研究員全員の意識は 持つていかれた。

## 第四話「ウロボロスではないが結社だ b yレーヴH」（後書き）

初戦闘！……だけどあまり描写はない。精々最初の誘拐の時が  
マシな方ですかねー。b yレン

ワルクラは予定通りに行けば、あと一、二週間くらいで投稿出来  
ると思います。b y結城葵

## 第五話 「そろそろ…… 来た b ヴ刹那

「どうも、刹那です。

まあいろいろとあつてようやく小学三年生になりました。

一応説明させてもらつと、この一年はずつとなのは達と遊んだり、魔法とか模擬戦とかしたり、《結社》フエンリルとしての仕事をしたりと、そんな感じで過ごしてきました。

ちなみに、最近では《結社》の名前が結構有名になつて來たみたいですね。……とはいって、彼らが知つてるのはウロボロスの方であつてフエンリルじゃないんだよね。まあ大抵潰しに向かう仕事しての名乗つてるのもレーヴェとレンだし仕様がないか。

あ、他の人達が仕事してない訳じゃないよ？ 他の人達は外で犯人達を狩り出して捕らえてるだけ。中に入る人達を制圧するのが、この一人。たまに私も加わるけどね。

まあその辺は置いといて。

今私は背中のネコ号のブリッジでなのはとユーノ、そしてジュエルシードが生み出したモンスター（？）を見ています。

「……リアルで見ても変な奴」

と、モンスターを見ながら呟く。

助けにいかないんですか？

「……私はフェイトの方につくし」

理由は……前も言つた氣がするけど、可愛いから。

あ、なのはが可愛い訳じゃないよ？ フェイトの方が私的に可愛さランクが高いだけ。

「さて……」

艦長席につけられた、まさに未来的な通信装置（画面が空中に出現するアレ）で、私の家に連絡を取る。

「……あ、エステル？ ん……、私。今日辺りからもう一つの方行くから……。ん、分かつて。じゃあ家は御願い……」

さて、行きますか。

\* \* \*

## フロイド side

第97 管理外世界『地球』。

母さんが欲しがつてゐるジュエルシードがある所……。待つて母さん、すぐに持つていくから……。

「フロイド、ここだよ」

と、アルフが指差すのはとあるマンションの一室。確か誰も住んでないから、地球にいる間はこの部屋を拠点にしようと、っていう話。私としては、特に異論もないでの何の問題もない。精々、拠点にするにはちょっと贅沢かな? と思うくらいだ。

さあ、部屋に入ろう、とドアノブをひね

「あら、レン達のお部屋に何か用?」

「「なつー?」「

中から出でて来たのは私と同じくらいの歳の女の子。紫色の髪を肩まで伸ばし、えーっとなんて言つんだつけ。『こ、こす……ゴスドリ? 【マスター、ゴシッククロリータ、通称ゴスロリです……】

そうそうー、ゴスロリ、ゴスロリ。そのゴスロリってことドレスみたいな服を来た娘だった。

「あ、あれ? ちょっと、アンタ誰だい! ? こいつって確かに空き部屋だったはずじゃ……」

「ここの部屋? ああ、それならちよつと今朝方引っ越して来たの

「んなつ……！」

アルフが驚きで口が閉じなくなつてゐる。私もそつなりそつだよ……。

と、とにかく……いつなつたら別の部屋を探すしか……。

「ん？ なんだレン。誰か來てるのか？」

と、レンと呼ばれた（自分でもレンって言つてたけど）娘の後ろから出て来たのは男の人。少なくとも私よりは年上で、えーっと……一四、五、六歳くらい？ かなあ。アッシュ・ブルondenの髪と、紫色の目。コート、なのか分からぬけど、膝まである上着を着た、確実にカツコい人の部類に入る男性だつた。

「なんか、用があつたみたいよ？」

「なら立ち話もなんだろ？ 中に入ると良い

「え、いや、あの……」

「アタシ達はそう言つ訳じやなくつてだねえ……」

「ちょうど家主がいなくて暇だつたの ほらほら、早く入つて入つて」

「いやいや、ちょっとまつ！？」

そういうつて私とアルフはレンに引つ張られて部屋に引きずり込まれた。

ああ……母さん、これからどうなるんでしょう……。

side out

刹那 side

アニメではフロイト達が拠点にしていた部屋は、私が先日買わせてもらつた。とりあえず無印が終わつたら売り出しちゃうけど。ガチャリ、と私は件の部屋のドアを開けて中に入る。

「ただいま……」

見ると、見慣れない靴が一足置いてあつた。なるほど、来てるのか。

リビングの方に行くと、案の定金髪の女の子と、オレンジ色の髪をした女性がいた。

「ああ刹那、帰つたか」

「四庫全書」

「もう、フェイトとアルフよ

……なんか一人が苦笑いしてる。招きかたが強引だつたりしたん  
だろうか。

卷之三

「あ、さういふや」

「お、お邪魔してますよー……」

……その辺の元氣がないんだから、

「レーヴェ、夕飯作るから手伝つて。レンはお茶出してあげて……」  
「分かった。君たちも食べて行くと良い。この部屋に用があつたのは君たちの邪魔をしてしまったお詫びだ」

「え……こや、でも!」迷惑ですか? (べーべー)

「お腹は正直ね

۱۰۷

そして、私とレーヴュはキッチンに向かった。

ふと呑ぬひ、おやんヒンせお茶を出しつこむがいだ。うん、偉

い偉い。

さて、今日のメニューはオムライスです。世間で一応有名なあのタンポポオムライスを実現させてみました。

オムレツを割ると、中からとろとろの卵が出て来て、それを広げてチキンライスを覆う。そして最後に私特製ケチャップをかければ。

うむ。  
完璧。

「じゃあ……いただきます……」

「…」

「当然だ  
刹那ニノゴトが止つたゞから！」

「だが、オムレツの方は俺じゃ出来ないから、刹那の方が功績は大きいんじゃないかな？」

……サザンモーターズ

「三才が料理出来る」で知られる田辺さん

卷之三

「ナニヤアレルギー」の問題

「だおかわりがあるぞ？」

スルカレ  
ヒリヤガタ  
カニカニカニカニ

たつ  
け?  
?

夕飯が終つてから、お風呂へ入る。お風呂の音一。

今日は泊まつていった方が良い

木の上に葉は、二枚に

卷之三

「文部省圖書」

夕達がいたからねえ。野宿だね！」

「あらあら。こんな夜に女一人で野宿？ 襲われたいのかしい？」

「おそれる？」

「うつ……そんなつもりはないんだけどねえ……」

「……泊まつていった方が良い。その方が安全」

「用事とやらも、今日済ませなければならぬ物なのか？ なら俺達も手伝うが

「あ、いや、でも……」

はあ……ちょっと面倒になつて來た。仕方ない、餌で釣る。

「……今朝拾つたこれあげるから、泊まつていく事

「え、つて、ええええええええ！？」

と、私が取り出したるは青い宝石。つまり、ジュエルシード。いやー、今朝本当に見つけちゃつて、一応拾つといたんだよねー。「！」、「！」、「これ！ どこで！？」

「公園に落ちてた」

凄い驚いてるな……。そこまで驚く事？

「……とにかく、今日は泊まつていって」

「泊まつていきなさこよ。これ探すため《…………》の拠点にするつもりだつたんでしょう？」

「「ッ！？」」

あ、もの凄い驚いてる。まあ、そりやそうだよね。私がフュイト達の立場でも驚くし。

「アンタ達……管理局かい！？」

「残念だが違う。あんな連中と一緒にしないでもらいたいな

「……あなた達の目的はなに？」

「二人の手伝い、じゃ納得しないかしら？」

「誰がするか！？」

敵意むき出しだなあ……。

「……あなたの母親にこう言つてみると良い」

「なつ！ 母さんの事知つてゐるの！？」

「知らないわけないじゃない」

「

「……とにかく、いつ聞いてみると良い。《結社》の協力はいらないか、つて」

「《結社》……？」

「彼女に言つてみれば分かるだろう。連絡を取つてみる」

「……分かりました」

渋々、と言つた感じで黙る。プレシアと連絡を取つているんだろう。

それにしても、フェイト達は知らないんだあ、《結社》の事。ちよつと残念。プレシアの頼み我が依事聞いてるんだし、知つてると思つてたけど。まあ、その程度じゃ知れはしないか。

「えつ！？」で、でも、良いの？

なんか驚いてるな……。そんなに予想外だったのか。

と、それから少しして、フェイトが口を開く。

「……協力しろ、との事です。あと、その内会わせてくれとも」

「……分かった」

「そりやそうよねえ。プレシアが私達を知らなかつたら逆にびっくりだわ」

「アンタ達……何ものなんかい？」

「俺達か？ 俺達は」

「……ただの《結社》……だよ」



## 第六話「今回の仕事はレンの出番無し！－ b ソレン」

さて。まず昨夜からお頃までの感想を言おうか。

フェイトめっちゃ可愛いつ……

もはやそれくらいしか出てこないよ……。アニメとかで見るフェイトもよかつたけど、リアルで見るフェイトももの凄く良い！ なにあの生物！ お持ち帰りして良いですかっ！？ あ、いるの私の家二号だった。

……ほん。まあそんな戯れ言はさておき。

フェイト達と私達は今、背中のネコ号に来ています。

え？ 見せて良いのかつて？ 良いの良いの。絶対に誰にも言わないでね、お母さんにも、って言つたから。まあその内プレシアも知る事になるだらうから大丈夫、とも付け加えたけど。

で、今いるのがシユミレーシヨン室。私が部屋の外で傍観する中、フェイトとアルフは模擬戦中。ジユエルシード探しはブリッジのリバスマンバーに任せて、こちらはフェイト達にとつたらお手並み拝見、私達に取つたらフェイト達の訓練をしている訳。

ちなみに、フェイトの相手はヨシュア、アルフの相手はエスティルがやつてます。

フェイト side

「 「はああああああああああああああツー！」

これで何回目だらうか。この人と鍔迫り合いしているのは。

刹那達が次元航空艦を持つているって聞いた時はもの凄く驚いた

けど、こんな部屋があつてまさか模擬戦する事になるとは思わなかつた。

とはいえ、私はさほど緊張していなかつた。……どうも悔ついたらしい。彼女たち《結社》を。

私の相手、ヨシュアさんはかなり速い。私と同等、もしくはそれ以上に。

いや、正直言えばかなりスピードは落とされているんだろう。いくら私でも分かる、この人はあえて私よりもフンランク下のスピードで挑んで来ている。

それでも まだ勝てない。

「くつ……！」

「ソウルブラーーー！」

彼がそう叫ぶと同時に、黒い波動が私を目掛けて飛んでくる。どうも私たちの魔法とはちょっと違つたものも使ってくるらしいことは模擬戦を初めて四、五分くらいで気がついていた。

私はそれを躊躇し、最大速度でヨシュアさんの背後に回つてアーチセイバーを振り下ろす。

「甘いよフュイト！」

が、ヨシュアさんはそれを予想していたかのようにすぐに振り向いて彼の双剣型デバイス、行雲流水。通称『フロークラウド』で受け止める。

「魔眼……！」

瞬間、バリバリバリ！ と、私に電撃のような物が走り、後方へと吹き飛ばされた。それだけじゃない。

「か、身体が……動かない……？」

「魔眼は相手の動きを阻害するからね。残念だけど 真の負けだ

「…………いや」

「まだだ。まだこの程度なり……。」

「まだ負けてませんッ！！」

私は全力で身体を動かし、起き上がつた。

「なつ……！」

さすがのヨシュアさんも驚いている。その隙、逃さないつ……！  
思いきりアークセイバーをヨシュアさんの首日掛けて振るう！  
が、

「……いない!? ッ！」

「せいつ……！」

ガツキイン……と、バルティッシュとフロークラウドがぶつか  
りあう。

「なるほど……君の相棒のバルティッシュがギリギリで防御魔法を  
発動して大半を防いだ訳だね。良いコンビだよ、ちゃんとフォロー  
しあえてる

「ありがとうございます……」

……どうも

「ははっ、どういたしまして。……さて、と。じゃあ今度は僕がコ  
ンビとしての力、見せてあげないとね……！ フロー……！」

了解です、マスター！

私とヨシュアさんの模擬戦は、まだまだ続くようだ。

side out

アルフ side

この女……メチャクチャ強いじゃないか！！

最初は甘そうな女だねえ、なんて思つてたアタシをぶん殴つてや  
りたいねッ！ 性格上はとんだお人好しみたいだけど、戦いに関し  
ちゃ一人前だよ！！

この女……エステルとか言つたかい。こいつが使つてるのは棒術。

デバイスの名前は確か……『スファイアソレイユ』、だつたかい？  
つたく！ 厄介な相手と模擬戦させてくれるよ！ リーチが全然違  
うじゃないか！

フロイトもフロイトで結構苦戦してゐみたいだし……。

しかもこれでまたまた手加洞してると来た！  
『緑社』にてのは  
本当に何者なんだい！？

「アルフー！ 集中切らすと倒しちゃうわよー。」

はう！ 誰か倒されるかうての！！！

テルが強いって訳か。はつ、上等じやないかい。手加減なんでした

「せえいッ！」

エスティルのスフィアソレイユを正面から受け止めてたんじやダメだ。結構な連撃で速いくせして一撃一撃がかなり重い。まだ手加減して来てるから良いものの、三発も連續でくらつたら確実に終わりだ。本気だったら 今のアタシじゃ、確実に一撃で終わらされる。

エステルが縦に、横に、斜めに振るつてくるスフィアソレイユを何とか受け流しながら懐に入る隙を探す。つつつても、ぜんつぜん見つからないんだけどねえ！

だ――――ツ！ こうなつたら突つ込んでやる――――

エステルの攻撃を流しながら、一瞬、ほんの一瞬だけだけど無理矢理懐への道を作りにかかる……けどダメだ！　一回流して前に進もうとしてもエステルが一步下がってきやがる！

「アーヴィング！」

「狼に火とは良い度胸じゃないか！！！」  
ゼツツツたいギヤフンと言わせてやる……

\* \* \*

模擬戦が終わってブリッジに戻つてくると　え？　勝敗？　フェイトは負けて、アルフは……時間<sup>発見</sup>切れまで粘つたから引き分け。とにかく、ジュエルシードが見つかった。場所は……原作通り月村邸だ。

「月村邸、か……。ごめんレー、ヴォ、フェイトと一緒に歩いて来て」「分かった」

「……？　刹那は行かないのかい？」

「あの家には刹那くんの知り合いがいるから正体は隠さなきゃならない。それに、結局はそのためにユニゾンするのだから、あまり関係ないんだよ。能力値の差程度の問題しかないしね」

「……来ヶ谷さんの通り」

なるほどねえ、とアルフが納得したように呟く。まあ、ユニゾンしなくとも変装、というか素顔を隠す事くらい出来るんだけどね。でも来ヶ谷さんが言つた通りユニークンしたつて仕様がないんだよね。どうせレー、ヴォに任せるし。一人で行く気もないし。いやフェイトがいるけど。

「じゃあ……アルフ、いつてくるね。えと、皆さんも……いつきます」

「フェイト、気をつけるんだよ」

「うん」

言つて、レー、ヴォとフェイトは空間直結型ジャンプ装置の中に入れる。名称はかなり適当。

これは名前の通り、空間と空間をつなげて転移する。まあ、正確にはどこでもドアみたいな感じなんだけど、違うのは世界間すら無視した一種の瞬間移動だって事。

イメージした場所を座標化し、手首に付けたフォールドボソン遠

隔発生指示装置を経由して、本体、つまり背中のネコ<sup>ロード</sup>にあるこれで発生指示の起きた所と座標化された場所を繋げてそこにジャンプする……っていひ」とらしご。これが一秒かかるか、かからないか行われる。

……私が作った訳じゃないから詳しく述べられないけど、そんな感じの装置。

あ、ちなみにここから飛ぶ時は背中のネコ<sup>ロード</sup>で座標を打つ。

「わふー、ぎひょーいすつきむらでー！」

……クド<sup>クドリヤフ</sup>が座標係というのは非常に氣になるなあ……。ちゃんと出来るから文句言えないけど……。  
さて。どうなるのかな……。

## レーヴ H.side

俺とフェイトは月村邸付近にジャンプして来た。能美クドリヤフ力がちゃんと人がいない事を確認してくれたおかげで、誰にもバレる事はない。

「フェイト、あれ……か……」

「……ネコ？」

「……でかい、な……」

な、なんなんだあのネコは……。あのネコがジュエルシードを使つたのか？ 巨大化したいとでも願つたのだろうか……。  
と、そんな事を思つてみると、結界が張られた。

視線を移すと、フレット(?)と、茶色い髪をしてツインテールの少女が、ネコに向かつて走つていく姿があつた。

「俺はあの少女をやる。フェイトはジュエルシードの確保を。……

なるべく痛くしないでやれよ？」

「分かつた。気をつけてね」

「大丈夫だ。剣帝の名は伊達じゃない」

さて……バリアジャケットを着たか。小さき魔導師……じゃフエイトもだから、白き魔導師か。

全く……刹那やレン、ティータ・ラッセルもだが、子供が戦わなくてはならない自体になるとはな……。大人が不甲斐ない、という事か……。

いや、今は物思いに耽る<sup>ふけ</sup>のはやめよう。俺は《結社》フェンリルの執行者Z.O.？、《剣帝》レオンハルト。そして今は任務中だ。あの白き魔導師への怪我はなるべく最小限に止める。それで今は十分だ。

この思考約0~98秒。

「……行くか」

呴ぐと同時に、フォールドボソンを使用して白き魔導師達の目の前へとジヤンプする。

……さあ、始めようか。

s.i.d.e o.u.t

なのは s.i.d.e

すずかちゃんの家に遊びに来ていた日、なんどジュエルシードが！なので反応のある場所に行つてみると……。

「……大きいね」

「……た、多分、あのネコの大きくなりたいって願いが正しく叶つたんだと……」

「……と、とにかく！ 早くジュエルシードを封印しなくちゃ！ レイジングハート！」

分かりました、マスター  
「よし、ジユエルシー」

「させん」

「ツー！　なのは！」

そんなユーノくんの大声と同時に、ユーノくんが私の前に出て障壁を張ると、何かが思いきりぶつかりました。

「ほう？　さほど本気ではないとは言え、俺の一撃を抑えるか。」

「面白い……っ！」

でもそれもほんの一瞬。ぶつかってきた人が少し力をいれてもう一度攻撃してくると、ユーノくんの障壁は一撃で壊されちゃった。

「ユーノくん！！　くつ……」

私は後ろに下がり、

「ディバインシュー」

「させんと言つている。零ストーム！！」

「ふえ？　きやあつ！！？」

その人が叫ぶと同時に、その人が持つている剣からタツマキみたいな風がなのはに向かつて飛んできました。そのせいしか分からんけど、ディバインシューターがふつと消えます。

「小さい白き魔導師よ。諦める、貴様では俺には勝てん」

そう言つたその人は　　その男の人は、私を見下ろしながらそう言ひいました。

「……分かる。私は多分、この男の人には勝てない。  
でも　　諦めるわけにはいかない！」

私の周りにスフィアを五個生成し、男の人に発射します！

「……AAキヤンセラー」

男の人がその腕を空に向けてあげると、掌から紅い光が飛び出し、それがディバインシューターに当りました。瞬間、ディバインシ

ユーターが消滅しちゃった……。

「ふつ……！」

と、男の人が言つると同時に、私の意識は薄れていった……。

side out

front side

ジュエルシードを封印する傍ら、横田でレーグンと白い娘の戦闘を見ていたけど……。

凄い。その一言に感動する。

全く相手の攻撃を許さず（といふか消してた）、圧倒的な力量差を見せつけた。多分だけど……今の私じゃまだまだ勝てない。

でも……いつかは……。

「レーグン、終わったよ」

「分かった。なら帰る」

母さん。私はもっと、強くなります。

第七話「近況報告……短いけど　ｂｙフロイト」（前書き）

珍しく一ヶ月かかった……。ワルクラもまだ執筆途中だし……ダメだ、最近……。

スランプ、つて訳じやないけどね。

## 第七話「近況報告……短いけど ブラフハイト」

### フハイツ Side

最近の日課はこうだ。

朝起きて刹那の作る朝ご飯をみんなで食べる。

みんなと一口に言つても、刹那は基本いつもいるけど、レンとレーヴェは毎回じゃない。というより毎回人が変わる。エスティルさんとヨシコアさんの時もあるしティオとエリィさんの時もあった。またにかく、《結社》のみんなが毎日交代でここに朝ご飯を食べにくる訳だ。

ちなみに、いつも一人一組でペアはよく変わったりする。この前はロイドさんとレンで来ていた。仲が良い、って聞いた時はちょっとびっくりしてしまった。同じ《結社》のメンバーなんだから当然なのには。

さて、朝ご飯を食べ終わると、お昼頃までのんびりしてから昼食を食べて背中のネックに行く。

本当はジューエルシード探しをしたいんだけど……見つけるまで遊んでなさい、と《結社》のみんなに怒られてしまった。子供のくせに働き過ぎだつて。別にそうでもないと思うんだけどな。

まあそんな感じなので、ティオやレン、ティータやヨナ達とゲームして遊んだりする。合間にショミーレーショナルームを使って模擬戦をやってもらつ事もあるかな。

正直、《結社》のみんなは強い。全員がSランク魔導師だつていのを抜きにしてもかなり強い。私なんてまだまだだ。いつも手加減してもらつてる。あのティオやレン、ティータだつて私より強い。ヨナは……インターネットが強い。

そういうえば、みんなのデバイスは元々使つていた武器、この場合は質量兵器なのかな？ を完全再現した物らしくつて、重さとか握

り心地とかが一寸の狂いもなく同じらしい。と、いうことは、と思ってアガットさんのじゅ、じゅ、じゅーけん？ を本気でお願いして触らせてもらつた。

はつきり言おう。

あんな物を振り回せるアガットさんは人間じゃない。

いや、一応アガットさんを含める刹那とブリッジ、防衛班のみんな意外はユニゾンデバイスっていうのらしいから細かいことを言つてしまふと人ではないのだけれど……でも何故か人間。

い、言つてる意味が分からぬと思つけど私もよく分からなかつた。

えつと……なんかみんなのユニゾンデバイスとしての力は希少能  
キル レアス 力みたいな物らしい。

だから実は食べ過ぎればちゃんと太るし、鍛えれば筋肉も付く。生殖機能もちゃんとあるらしく、子供も産めるらしい。でもその事を知つたのは本当に最近みたい。みんなのリーダーである刹那ですら知らなかつたんだから相当びっくりしたに違ひない。

えと、話がずれたね。

とにかく。じゅーけん、漢字だと……重剣？ を振り回せるアガットさんは人じやないと思う。魔力で強化してるならまだしも、何の強化も無しで自由自在に振り回すのだ。……私じゃ柄を持ち上げるのがやつとて、剣身は一ミクロも上がらなかつたのに……。ていうか両手使つてる時もあるけど、片手で振り回す時もあるもんだから本当にびっくりする。

……でも、もつとびっくりしたのは模擬戦した時なんだよね……。もの凄い雄叫びをあげながらこっちに突っ込んでくるその様を目の前で見ると……うう……恐かつた。ティータはよくあんな恐い人と一緒にいれるなあ。いや、本当は優しい、っていうのは分かるんだけどね？

ていうか、

『ケンカは気合いだッ！ ゴチャゴチャ考えてねえで突つ込め！』

なんて言われた時はびっくりした。ケンカは済合いつて……ケンカじゃないんだけど……。

そして、習慣の話に戻るつ。

と、言つても遊んだり模擬戦したりした後は、ジューエルシードが見つからない限り基本食堂で「」飯食べてお風呂もぬつて歯を磨いて寝る。こんな感じだ。

正直言つて、もの凄く充実してる。んだけど……。

「へーん……母さんが待つてるのに、こんな生活で熙いのかなあ……」

Side out

## 第七話「近況報告……短いけど バンフサイト」（後書き）

と、いうただの時間稼ぎだぞ、と。

すいません、何だか「プロット書いてないから仕様がないよね！」  
っていう言い訳使いたくなるほどにネタもストーリーの流れも思い  
つかない物で……。

さすがにこれ以上どっちも更新しないのはキツいだろ、とこうこ  
とで、なのはだけでも更新してみました。……短いけど。

近いうち……になるといいけど、ワルクラも頑張つて更新します  
！！

## 特別講義の「精神の外圧による口癖」（前書き）

遅くなりました……。

キャラ崩壊している人も若干いますが……どうか勘弁してください。

## 特別話題①「背中のネコ園とのある日常」

『……執行者ノ。・。・。 漆黒魔術師 ノワール（勝手に周りがつけた）、本名『彌彩刹那』率いる 結社 フェンリルの様々な理由から、最近虚数空間にありとあらゆる技術で作られた本拠地。』 背中のネコ園。本当にもつとカツコい名前になるはずだったが、とある生意気なナヨナヨ少年「誰がナヨナヨ少年だ！！」が、名前を決めるとき、

『戦艦が背中のネコ号なんだからやー、背中のネコ園でいいじゃん。面倒だし』

などと言つてしまつたがためにこんな名前になってしまった。まあ、気にしている人物は誰一人としていないのだが。

さて、これはそんな背中のネコ園でのとある日常生活である。

\* \* \*

「ああ……冒険……ぼうけん……ぼーけん……ボーケン……B O  
U K E N ……ぼ・う・けー・んんんんん……」

背中のネコ園のとある食堂で叫んでいる炎のように赤い赤毛を持つ青年、アドル・クリステイン。いつもなら生氣に満ち、爽やかに笑っているのだが、今ではまるで狂人のようなオーラを出しながらぶつぶつと何か言つていた。

「お、おいアドル……気持ちは分かるけどよお。迂闊にどうか冒険してたら管理局連中が……」

「管理局がなんだって言つんだッ……あんな連中が恐くて冒険な

んか出来ないッ！！ そもそもあんなクズ共よりも恐い奴と今まで戦つて來たじゃないか！ 良いかいドギ、僕の冒險魂を止められる物は誰も！ いや、刹那以外にはいないんだよツツ！！

「その刹那に止められてるから行かれないんだつたなあ」

「クツ……もづ……もうダメなんだ……！ 僕の冒險魂が荒れ狂い僕のなかで暴れ回っているんだよ……ツ！ これ以上押さえつける事は出来ないんだ！！」

「びみょーに厨二的に聞こえなくもないんだが……頑張ってくれよアドル。刹那だつて言ってただろ？ もうじき管理局なんざ気にしないで冒險出来るようになるからガンバつてくれって」

「それからもう何日経つてているんだい！！ もう一日もたつたじやないか！！！」

「まだ一日しか経つてないだろ！？」

「今僕にとつては一四時間ですら一〇年にも感じるんだ！！」

「重傷過ぎただろ！！？」

アドルの冒險好きは誰よりも知つているドギだが、さすがにここまでとは思わず軽く引いてしまつた。……というよりも、いわゆる禁断症状みたいなものがここまでとは思わなかつたと言つべきか。

アドルは普段しない貧弱振りをしながら血走つた目をしつつ、またぶつぶつと冒險冒險、と呴き出した。正直言つて不気味である。

ガタリ、と隣の席に生意氣王女が座つた。

「誰が生意氣王女よ……。ねえドギ、なんかまた悪化してない？ 段々恐くなつて來たんだけど……」

「少なくとも一四時間を一〇年に感じるくらいには悪化してるよ」「メチャクチャ悪化してるじゃない！！」

生意氣王女、アイシャは目の前に置いたラーメンにレンゲを浸しながら言つた。何故だか知らないが、アイシャはここに来てからいろいろな物を食べている。そのせいか最近体重が怪しくなつて来ているのだが……まあその辺は今の所誰にも知られていない。

ため息を一つつき、「ラーメンのスープを一口飲んでから麺をする。ズルズルズルーつ、といい音を立て、一滴の麺に絡まつたスープが弾かれるように飛ぶ。

「ん~」このラーーメンって言つのも美味しいわね~。別世界の料理つてどんな物かと思つてたんだけど、どれも美味しいくて良いわね~。つい一杯食べちゃうわ~

「それで最近体重が二つのとか言つてたバカ王女はどうだ?」

続いてアイシヤに向かいに黒いマントと何故かハルバードを持っている青年、ガッシュが座つた。

「ちょ、ちょつとガッシュ!! 女性にそういうのはデリカシーがなさ過ぎるわよ!~」

「うつせ、本当の事なんだから良いじゃねーか」「よくないわよ!~」

「つたぐ、こまけ一事をぐしひと……これだからバカ王女は」「誰がバカ王女よ執行者N.O.-29 生意氣傭兵 ガッシュ君!~?」

「てめえ……それで俺を呼ぶんじゃねえ!! 剝那あいつが付けたから認めてやつただけで呼ばれてえわけじやねえんだよ執行者N.O.-3

0 生意氣王女 !~」

「ちょつ……アンタこそそれで呼ばないでよ!~」「テメエが先に呼んで来たんだろうが!~」

「アンタが先に喧嘩売つて来たんじょ!~?」「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……!~」

「お前らなあ……アドルはこんなだけど、こいつもオレも一応飯食つてんだぞ? ケンカすんなよそでやつてくれよ」

「「「ドギ(筋肉達磨)は黙つて(黙つてろ)!~!」「……なんでオレが怒られてんだ?」

壁をぶち壊す非常識人も、今回ばかりは、常識人であつた。

\* \* \*

場所が変わつてツインテール遊撃手ブレイサーと、女装したら姉に似ている遊撃手、エステルとヨシュアの部屋。

そこには、エステルとヨシュアは当然ながら、今はエリイとクローゼにショラザード、そして何故かアガットとティータがいた。

七人は適当に雑談しながら食堂から貰つて来たご飯を食べていたが、

「ところで、エステルとヨシュアはともかく、アガットとティータはいつ結婚すんのよ？」

「ブー————ツ————！」

「ひやあ！？」

「アガット汚いわよ……」

「いや、まあアガットさんの気持ちは分かりますけど……」

「ふう……スペゲティにからなくて良かつた」

上からクローゼ、エステル、ヨシュアにエリイの順に言つた。

「テメエショラザード！——突然なに言つてやがる！」

「はわわ……私とアガットさんがけけ、結婚！？」

「だつていつつも恋人みたいな感じじゃないアンタ達。ラヴラヴいちゃいちゃと……。あ、ラ『ブ』の『ヴ』重要よ？」

「どうでもいいわ！ 別に恋人みたいな事なんぞしてねえだろ！——」

「あれ、自覚なかつた訳？」

「まあアガットだしねえ。でもま、もう手遅れじゃない？ だつて既に影では口リコンつて言われちゃつてる訳だし？」

「ちよつ、ちよちょちょつと待てえッ！——？ 何だそれは！——

「……エステル、そういう事実は言わないであげるのが優しさだよ

「えー、でも本当の事じゃん」

「まあ……僕も聞いた事はあるけど……」

「ヨシュア————！ テメエ嘘でも良いからそこは否定し

ନୀତି କାନ୍ତିର ପଦମୁଖ ହେଲାମାତ୍ରଙ୍କିଳାଙ୍କିଳି - - . ।

号泣だつた。もはやアガツトですら号泣だつた。

ちなみに、ティータはまだ顔を赤くしながら「えへへ……アガツ  
一から二番目で、二つめつけてくる。

新編　日本書紀傳

「で、エリイちゃんはロイドとどうなのよ？　あいつ結構鈍いですし

卷之三

いや、云々、天然の力にして、力云々

それは醫者捨てたひないんだけ  
「……」

「あー、そういうえば恋人同士になる前は言われなきや全然気付かなかつたんだけど、ティオ……あ、特務支援課のティオちゃんじゃなくって、私の親友の方ね。そのティオから聞いたんだけどさ、ヨシニアってやっぱりモテるのねー。私が恋人になつて尚まだ好きな子いたもん」

「マジック」

「マジよ。奪い取ろうなんて娘もいるんだから。まあそういう危な  
い芽は潰し 口赤ン、説得して諦めてもらつたナゾ

「今體」の讀法と「今體詩」の歴史

ちょっと、エステル！？

「ミシコアさん……女の子には、殺らなきゃいけない時があるんで  
す……」

今確実に『やる』の文字が違つたよねえ！！？

「わい…………良いじやないその話は

ユアも気にするわねえ

「だつてシリセ... もあ わいだこです。」

ヨシュアはため息をついて俯いた。

「で、どこまで話したっけ？」

「ロイドが天然のたらしだってどこまでです」

「ああそろそろ。で、今どのくらいのライバルがいる訳？」

「そうですねえ……、としばらく考え込むと、

「確実つぽいのがティオちゃん、怪しいのがリーシャさん……って

所ですね。私が気付ける範囲だと」

「あー、あのアルカンシェルの娘ね。確かに微妙って感じ。あの娘がライバルになるかならないかは今後のロイド次第ってところから」

「……落とされる可能性はかなり高そうな気はしますけど。早めに決着付けた方が良いのかなあ……」

「そうよ、勇気を出して告白しちゃえばいいんだよー」

「うう……でもやっぱり恥ずかしいのよね……」

「まあ頑張りなさいな。きつと最終的には告白しなきゃいけないような状況になるわよ」

「エステルみたいにその場の勢いでつい言っちゃう、なんて事もあるかもね」

「ああ、やっぱエステルってそうだったのねー。お姉さん納得。ああ、ところでいい加減アンタ達一人はキスの先まで言つた訳？」

「「突然過ぎる……」」

外はどうでも、ここは平和でした。



## 特別話やのー「背中のネコ園のとある日常」（後書き）

はーい、前回と同じく時間稼ぎです。

まあ一応本編は書き途中なんですがねー……。本当最近読む方専門になりかけてきてるよ……。

今回は……多分イース勢初登場、だと思います。アドルが冒険出来ずにつづつと過ごしたらどうなるのかなーって思つてやってみました。イースV/S空の軌跡の勝利時の台詞に、「冒険は僕の全てなんです」とか何とか言ってたから、長期間冒険出来なかつたらこんな感じになつたりして、みたいなノリでした。

ガツシューとアイシャはなんだかんだでお似合いですよねー。

あと一つアンケートみたいな事をしたいです。

……執行人の一いつ名を考えてください！ 御願いします！！

元执行者のレンとかレーヴェとかヴァルターとかその他二、三人はそのままで行くんですけど、他の人達本当に人数多くて……。まあ全員は出さないでちょうどいい……基本的に気分で出る人が決まるんで。

あ、でも出来れば一人多くても一、三人で御願いします。いっぱいでも被っちゃってどっちにしようか決められなさそうなので……。

まあとにかく。気が向いたらで良いので、お願ひします！

## 執行者リスト

- NO・1 『漆黒魔術師』 ノワール（翡翠刹那）
- NO・2 『剣帝』 レオンハルト
- NO・3 『太陽の守護者』 ヨシュア
- NO・4 『極光の太陽』 エステル
- NO・5 『姫騎士』 クローゼ
- NO・6 『幻惑の鈴』 ルシオラ
- NO・7 『重剣』 アガット
- NO・8 『瘦せ狼』 ヴァルター
- NO・9 『不動』 ジン
- NO・10 『怪盗紳士』 ブルブラン
- NO・11 『愛の狩人』 オリビエ
- NO・12 『銀閃』 シエラザード
- NO・13 『可愛い』 正義 アネラス

- No'14 『タマネギ剣士』 リシャール
- No'15 『殲滅天使』 レン
- No'16 『愛しさ100%』 ティータ
- No'17 『不良神父』 ケビン
- No'18 『聖杯騎士』 リース
- No'19 『蒼騎士』 ユリア
- No'20 『皇子の子守り』 ミコラー
- No'21 『飛脚』 ジョゼット
- No'22 『熱血捜査官』 ロイド
- No'23 『お嬢様捜査官』 エリイ
- No'24 『猫愛好家』 テイオ
- No'25 『女好き警備隊』 ランディ
- No'26 『月影』 銀
- No'27 『太陽の親父』 カシウス
- No'28 『がきんちょハッカー』 ヨナ

- No · (仮) 『ヒマワリ笑顔』 キーア
- No · 29 『生意氣傭兵』 ガッシュ
- No · 30 『生意氣王女』 アイシャ
- No · 31 『赤毛冒険家』 アドル
- No · 32 『壁壊し』 ドギ
- No · 33 『森の狩人』 エルク
- No · 34 『怪力女』 クルシエ
- No · 35 『風音の読み手』 マイシェラ
- No · 36 『勇気の剣継承者』 チェスター
- No · 37 『棗兄』 恭介
- No · 38 『棗妹』 鈴
- No · 39 『普通の少年』 理樹
- No · 40 『筋肉馬鹿一直線』 真人
- No · 41 『真人のライバル』 謙吾
- No · 42 『メルヘン少女』 小毬

No '43 『騒がし乙女』 葉留佳

No '44 『えきせちっく（自称）なマスコット』 クドリヤフカ

No '45 『姉御』 唯湖

No '46 『N・Y・P』 美魚

No '47 『女王猫』 佐々美

No '48 『姉バカ一直線』 佳奈多

No '49 『ボケまくつの完全無敵少女』 沙耶

No '50 『ジャンク屋』 ロウ

No '51 『静かなる傭兵』 ガイ

No '52 『傭兵A』 イライジヤ

No '53 『部隊の紅一点』 ロレッタ

## 執行者リスト（後書き）

執行者ってこんなにいたんだ……。ちなみにカシウスさんは最後に思い出しましたw

ぶつちやけジョゼットはあまり好きじゃないから入れんのやめようかなー、とか思つてしまつた訳だけど、なんかジョゼットファンな方に怒られそうな気がするからやめました。

特務支援課トイース勢とサーゲントテールの二つの名は結構適切。

キーアの（仮）は、別に執行者ではないので、って事で、仮にさせてもらいました。

一つ名提供をしてくれたハルさん、どうもありがとうございました。いくつか使わせていただきました。エステルのはキーアにまわした上にカタカナにしちゃいましたけど……。  
これからもよろしく御願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2008s/>

---

魔法少女リリカルなのは Setsuna's Story (RoDSその1)

2011年10月5日07時24分発行